

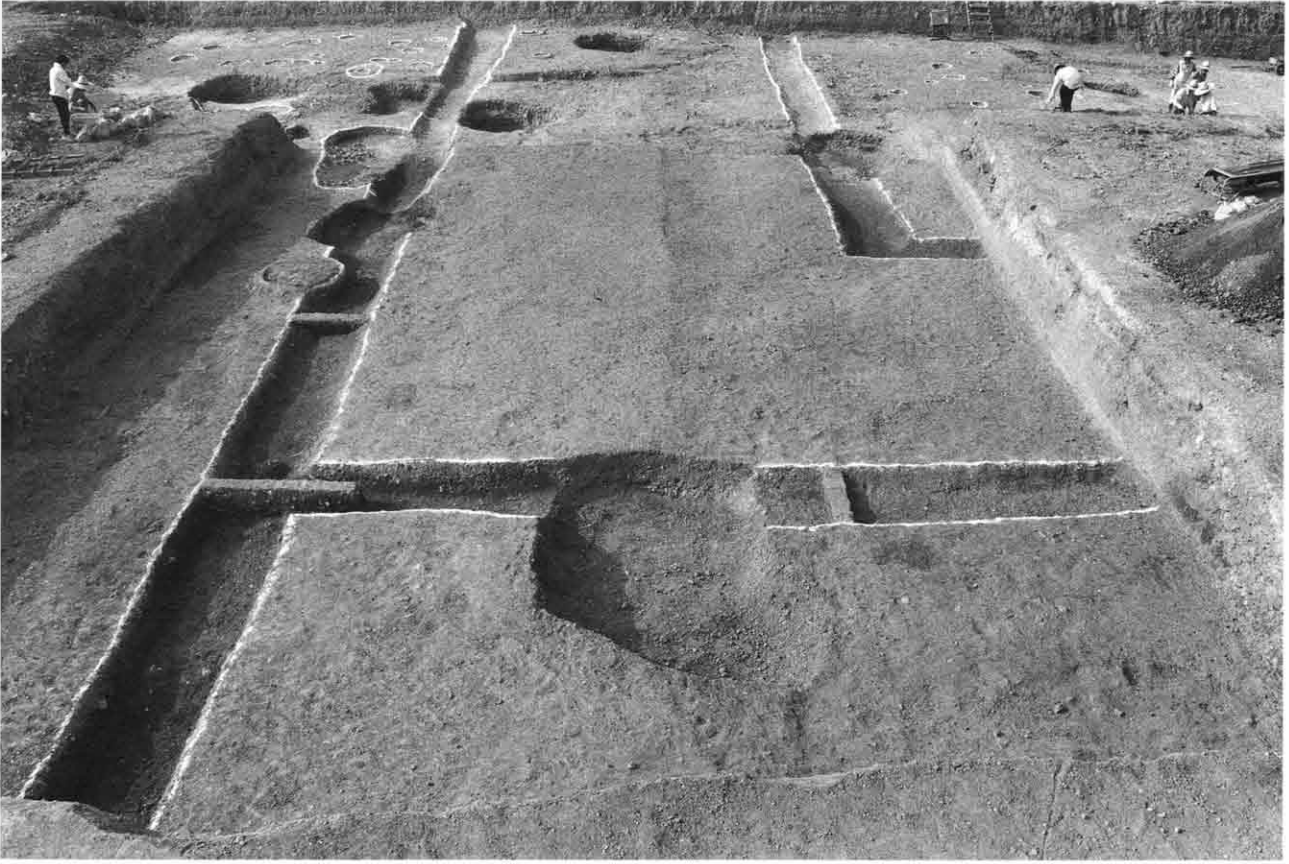
京都府埋蔵文化財情報

第 59 号

中世土器の編年(中)-----	伊野 近富-----	1
長岡京跡左京第366次調査の問題点—第4トレンチを中心にして—-----	小池 寛-----	11
弓田遺跡の発掘調査-----	橋本 稔-----	17
理論考古学の節度-----	河野 一隆-----	23
—平成7年度発掘調査略報—-----		29
13. 奈具谷遺跡	19. 千代川遺跡第20次	
14. 枯木谷遺跡	20. 中海道遺跡第34次	
15. 桑原口遺跡	21. 長岡京跡右京第498次	
16. 嶋遺跡	22. 井尻遺跡	
17. 池下城支城跡・堀古墳	23. 興戸宮ノ前遺跡	
18. 上中太田遺跡	24. 柿添遺跡第2次	
府内遺跡紹介 69. 冷然院跡-----		49
長岡京跡調査だより・56-----		52
センターの動向-----		56
受贈図書一覧-----		58

1996年3月

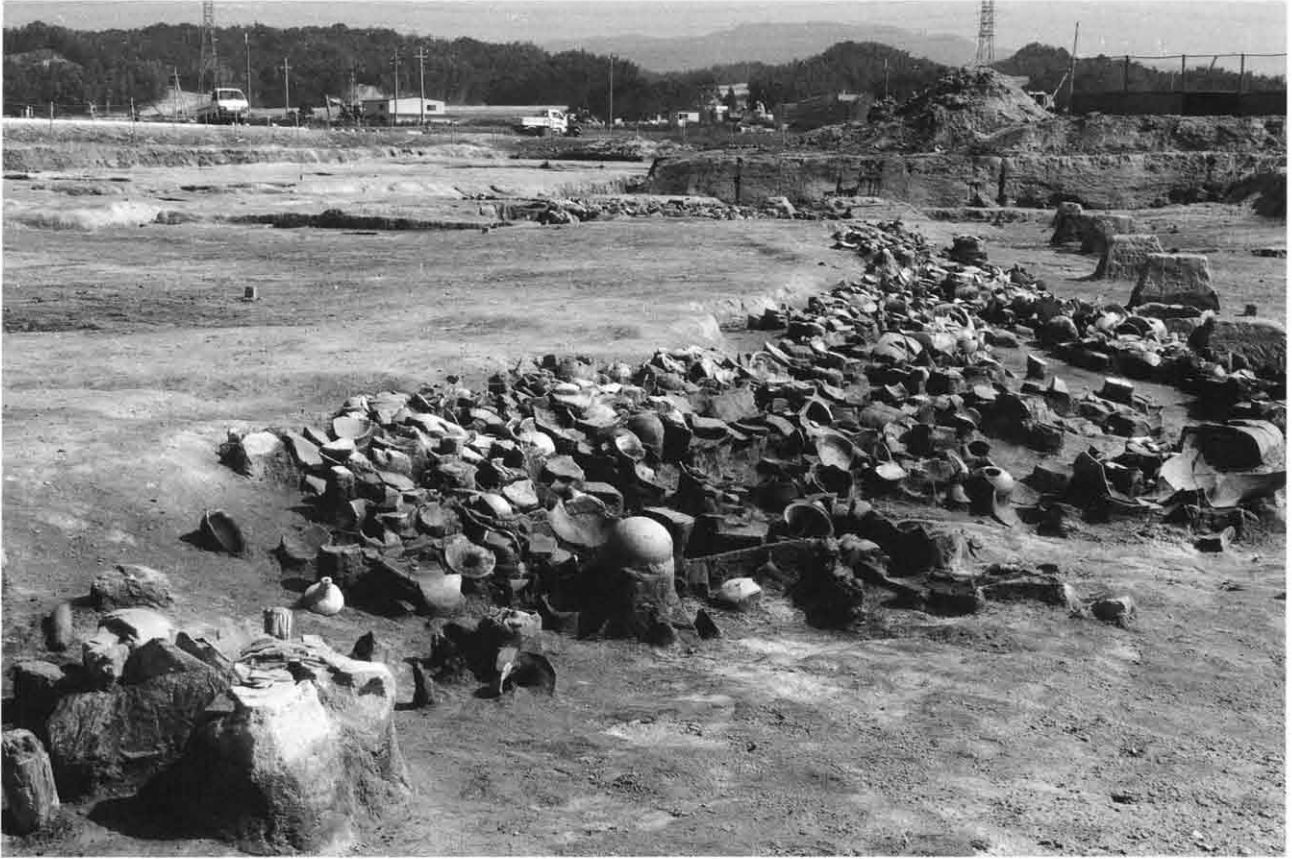
財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



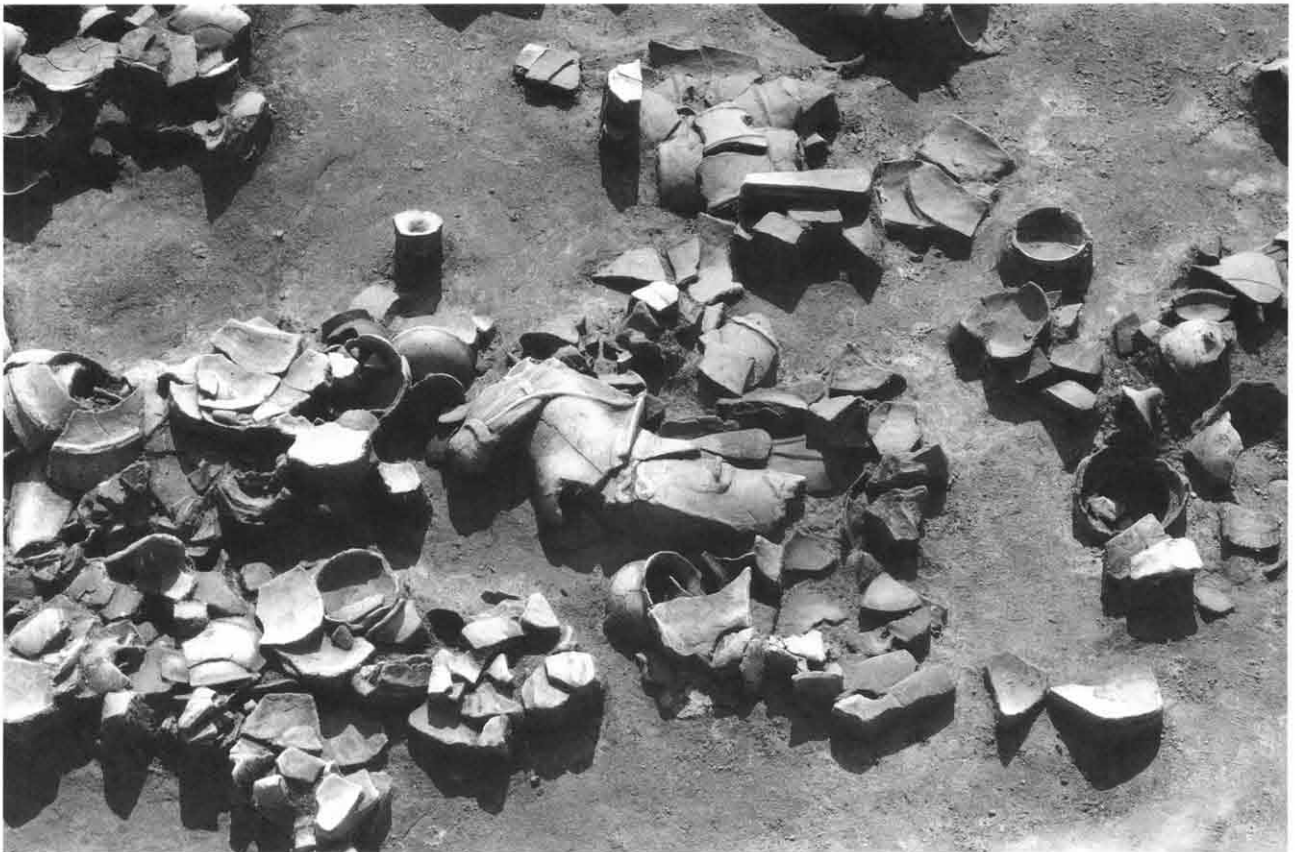
(1) 四条条間小路・東一坊坊間東小路の交差点検出状況（南から）



(2) 第4トレンチ、奈良時代杭列検出状況（東から）



(1) 溝5東岸の出土遺物群（北西から）



(2) 溝5東岸出土の土器及び埴輪（東から）

中世土器の編年(中)

伊野近富

1. はじめに

前稿(「中世土器の編年^(注1)」)では、丹波地域に限定して編年案を提示した。その中で判明したことは、15世紀の資料が少ないという点であった。これに関しては、今後、資料が増加した段階で補足してゆきたい。

今回は、京都府北部(丹後)の編年を提示して、大要を把握しておきたい。ここでも、前稿と同じく筆者が最近提唱している原型・模倣型の考えを実際の土器に適用してみたい。

2. 研究史

丹後における中世土器については、1977年の高橋美久二による『林遺跡発掘調査報告書^(注2)』での提示を嚆矢とすることができる。ここで、畿内周辺で出土する瓦器碗に相当する碗として黒色土器の存在が明確となった。その後、1979年に杉原和雄によって黒色土器の編年が明示された^(注3)。そして、1987年竹原一彦によって更に細分され4期10型式となった^(注4)。

黒色土器を始め、他の土器を含めた編年案については、中世前期が1985年伊野「京都北部の中世土器について」『中近世土器の基礎研究』が、中世後期が1984年中畹陽太郎「中野遺跡出土の中世土器について」『両丹地方史』39号が古い例である。その後、中畹は宮津城跡の遺構の状況をもとに、細川氏段階(1580年築城)と京極氏段階(1600年丹後に入る。1625年頃には城が完成。)とに分け、中世末期～近世初頭の編年を提示した。

個別の問題として、丹後で確認できる洛外産土師器皿模倣資料を百瀬正恒は1985年に集成し、その年代観にも触れた^(注5)。そして、石鍋については岡田晃治が1982年に『太邇波考古^(注6)』で紹介した。近年では、加悦町桜内遺跡で丹波原型瓦器碗と丹後原型土師器皿・黒色土器が共伴し、12世紀の基準資料が得られた^(注7)。また、百瀬は『概説 中世の土器・陶磁器^(注8)』の中で11～16世紀の編年案を示した。この中で丹後地域のまとめとして、須恵器の技術である底部糸きり技法が黒色土器に受け継がれたとした。また、回転台土師器皿が黒色土器と共に生産されるが、黒色土器消滅後しばらくしてなくなり、てづくね成形にかわるとした。そして、中野遺跡では15世紀に京都Ⅱ群土師器(筆者のG・Iタイプ)を模倣したものが出土することを指摘し、全国的には16世紀前葉からなので、模倣の早い例であると注目した。城の集成の際、土器の写真を載せ、遺物の概要を知る資料として『特別展 城の考古学^(注9)』がある。

なお、中国製陶磁器については京都府立丹後郷土資料館で特別陳列が1994年になされ、丹波・

丹後を中心とした資料が展示された。その段階で約100か所の遺跡が集成されている。^(注10)

3. 編年の基準資料

それでは、編年に必要な基準資料を提示したい。年代観は平安京の土師器皿編年を援用したものである。

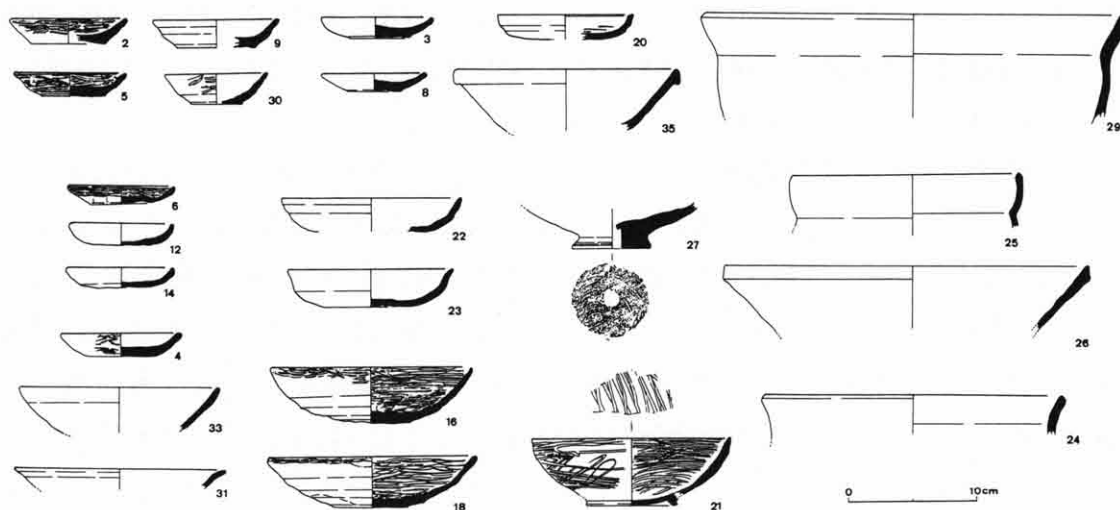
(1) 桜内遺跡^(注11)(与謝郡加悦町桜内)

丹後地域の中央に南北に細長い加悦谷がある。そこには野田川が流れているが、この東岸に桜内遺跡は立地している。今回は井戸 S E 01～03の3遺構の遺物を提示する。

S E 01からは土師器皿3・8が出土した。いずれも底部糸きりである(丹後原型Aタイプ)。黒色土器は内黒の椀19(丹後原型Bタイプ)や両黒の皿2・5・9、杯30があり、いずれも底部糸きりである。内外面ともミガキを施す。皿は丹後原型Aタイプ(2・5)、同Bタイプ(9)とする。瓦器皿20は、内外面ともミガキを施したもので、口縁部を二段ナデし、端部をヨコナデしたことにより段を成したものである。12世紀前葉～中葉と思われる。土師器鍋29(Aタイプ)は中丹地域から丹後にかけて分布するものである。35は白磁椀V類で、中国南部産と思われる。12世紀後葉～13世紀初めのものである。

S E 02からは土師器皿22・23が出土した。いずれもてづくね成形である。特に22は洛外産土師器皿Aタイプの模倣である。12世紀中葉と思われる。23は口縁部一段ナデである。丹波原型より深手で丹後原型といえよう。土師器杯27は、底部が1cmほどの円盤状高台である。中央に円孔をあけるが、このタイプは少し出土する。須恵器鉢26は東播磨系である。12世紀後半と思われる。

S E 03からは土師器鍋24(Aタイプ)が出土した。黒色土器は両黒の皿4と内黒の椀16・18(丹後原型Bタイプ)が出土した。すべて底部は回転糸きりである。瓦器椀21は内外面とも密にミガ



第1図 桜内遺跡出土遺物実測図

S E 01 : 2・3・5・8・9・20・29・30・35

S E 02 : 6・12・14・22・23・25～27

S E 03 : 4・16・18・21・24・31・33

黒色土器 : 2・4～6・9・16・18・30・33

土師器 : 3・8・12・14・22～25・27・29

須恵器 : 26

瓦器 : 20・21

白磁 : 31・35

キを施したもので、口縁部が少し肥厚し、口径に対して底径の占める割合が40%を越えるほどの特徴から、丹波原型と思われる。12世紀前葉～中葉であろう。

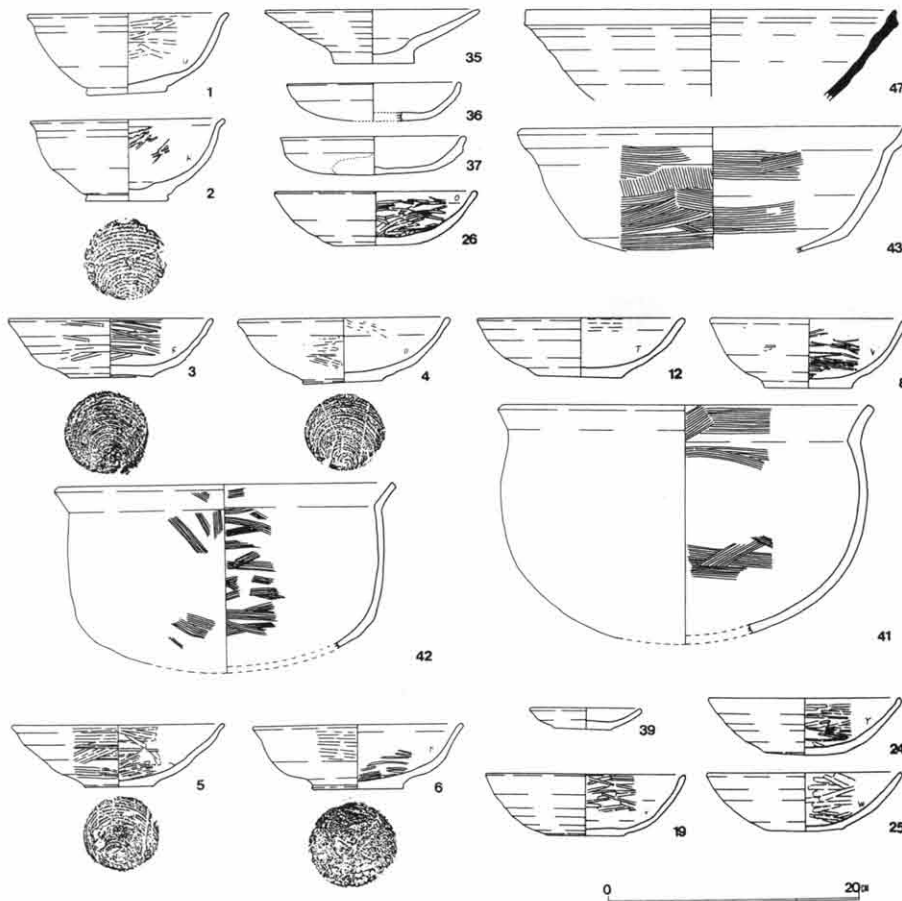
これらの土器群は12世紀中葉を中心とし、その前後と思われる。

(2) 滝岡田古墳(与謝郡加悦町滝)
たきおかだ (注12)

滝岡田古墳は、桜内遺跡とは野田川を挟んだ西岸の河岸段丘上にある。横穴式石室の上層で3層にわたって中世土器が出土した。上層から11層・12層・15層である。

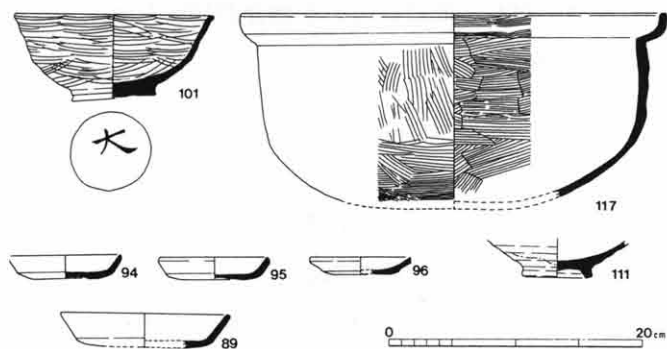
11層では土師器皿36・37が出土した。てづくね成形である。同杯35は回転作用を利用して成形している。同鍋43は底部を屈折させた浅手のもので、鉄鍋の模倣と思われる。粘土紐巻き上げで成形している。黒色土器碗は平高台が明確ではないもの26(丹後原型Cタイプ)と、明確なもの1・2(丹後原型Aタイプ)の二種がある。いずれも回転作用を利用して成形している。東播磨系鉢47は12世紀後半と思われる。

12層では土師器鍋41がある。体部は丸いが底はやや尖り、深手である。丹後原型Aタイプである。42は底部が屈折するが、体部が円筒形で直線的である。洛外原型を模倣したものだが、他の器形にもみられる丹後特有の深手である。黒色土器碗8(Aタイプ)・12(Bタイプ)は内黒である。平高台で回転台成形である。



第2図 滝岡田古墳出土遺物実測図

第11層：1・2・26・35～37・43・47 第12層：3・4・8・12・41・42 第15層：5・6・19・24・25・39
 黒色土器：1～6・8・12・19・24～26 土師器：35～37・39・41～43 須恵器：47



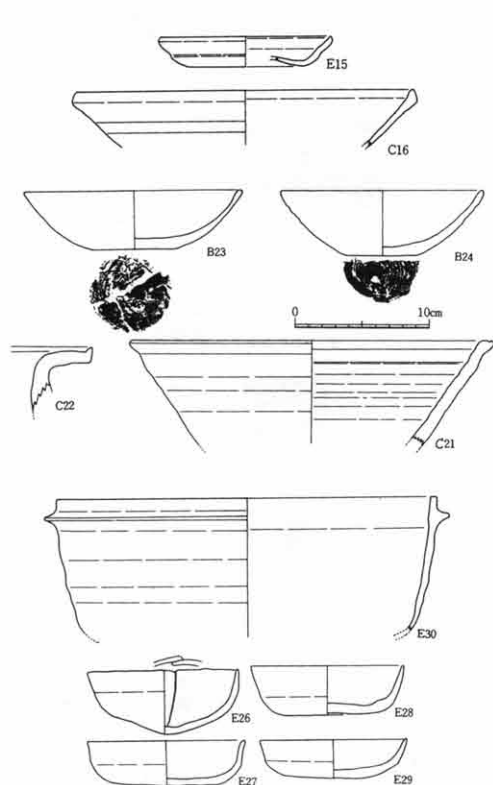
第3図 竹野遺跡出土遺物実測図

I-D-1: 101・111・117 I-C-1: 89・94~96
 黒色土器: 101 土師器: 89・94~96
 瓦器: 117 白磁: 111

15層では土師器皿39が出土した。底部は糸きりである。黒色土器はすべて内黒である。5・6は平高台の屈折が明瞭である。内外面ともミガキを施す。19・24・25は平高台だが、屈折は明瞭ではない。

報告者によれば、黒色土器碗は高台がはっきりしたものから不明瞭なものへと変化するというのが通説であったが、上層で1・2のように明瞭なもの(丹後原型Aタイプ)が出土し、下層で24・25のような不明瞭なもの(丹後原型Cタイプ)が出土することから、これは1系統の変化として捉えるのではなく「形式的には異なる土器が同時期に存在する可能性が高い」とした。私のみたところ、B・Cタイプは下層が深手で上層が浅手となるようである。

なお、これらの土器群は上層で出土した須恵器鉢が12世紀後半のものであることから、およそこの頃からそれ以前のものであることがわかる。



第4図 林遺跡出土遺物実測図

6号配石遺構: 15・16 1号溝: 21~24
 2号溝: 26~30
 土師器: 15・26~30 須恵器: 16
 越前焼: 21・22 黒色土器: 23・24

(3) 竹野遺跡^{たかの(注13)}(竹野郡丹後町竹野)

弥生時代前期の集落遺跡でも有名な竹野遺跡は、丹後半島の北端にある、砂丘上に形成された遺跡である。包含層からは、中国製陶磁器が多数出土している。ここではI-C-1・I-D-1より出土した資料を提示する。

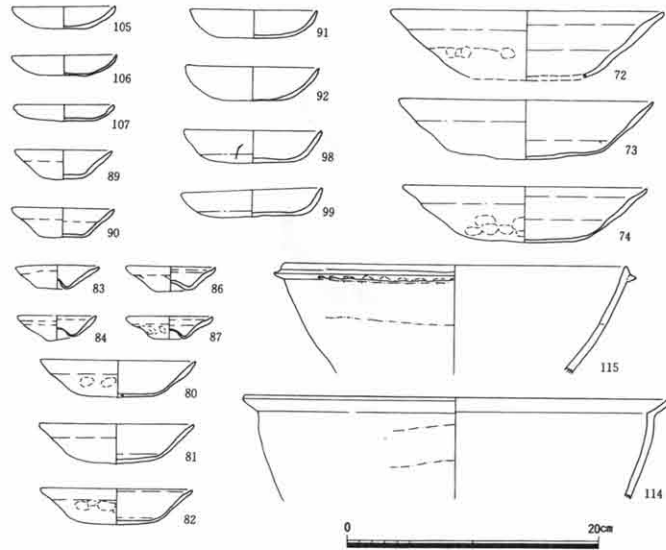
土師器皿94~96はてづくねで成形したものである。洛外産土師器皿Jタイプの模倣で、口縁部に一段ナデを施している。黒色土器碗は回転ナデで成形したもので、外底面に「大」という字が墨書されている。丹後原型Aタイプである。白磁碗は底部のみではあるが、おそらくV類である。瓦器鍋は山城模倣型である。ただし、山城原型では外面はユビオサエであり、タテハケはしない。これらは12世紀後半~13世紀初めと思われる。

(4) 林遺跡^{はやし(注14)}(竹野郡網野町林)

大古墳である網野銚子山古墳の近隣にある砂丘上の遺跡である。6号配石遺構では洛外産土師器皿Jタイプの模倣型15が出土した。須恵器鉢16は

東播磨系のもので12世紀末～13世紀初めである。

1号溝では黒色土器碗23・24(丹後原型Cタイプ)が出土した。底部は糸きりである。陶器鉢は越前焼と思われる。陶器壺も越前焼と思われる。口縁部の形態によれば13世紀前半と思われる。2号溝では土師器皿26・27が出土した。26は粘土円盤切り込み技法によって成形されている。27はてづくねである。口縁部は一段ナデで深身である。丹後原型Bタイプで



第5図 中野遺跡S E 82出土遺物実測図
すべて土師器

ある。土師器羽釜は洛外模倣型である。これらは13世紀後半～14世紀初めのものであろう。

(5) ^{なかの(注15)}中野遺跡(宮津市中野)

丹後国分尼寺推定地である。ここでは多種多様の遺物が出土している。特に中国製陶磁器は1984年までで800点以上出土しており、丹後随一の出土量を誇る。今回は井戸S E 82の資料を紹介する。

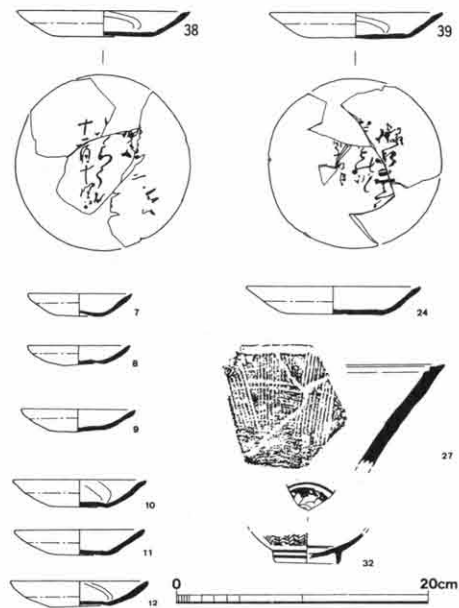
土師器皿72～74・80～82・89・90は、洛外産土師器皿G aタイプの大・中・小の模倣で、83・84・86・87は同G bタイプの模倣である。これに対して91・105などは同Jタイプの模倣だが、口縁部は尖り、その原型とは似ても似つかないものである。むしろ、丹後のCタイプとした方が良いかも知れない。

土師器鍋114は山城原型の模倣型で、口縁部が短くなっている。羽釜115は山城原型の模倣型で、鏝が退化したものである。すなわち、土師器皿は洛外原型G a・G bタイプと、丹後原型で構成され、土師器鍋は山城模倣型で構成されている。これらは15世紀中葉頃と思われる。

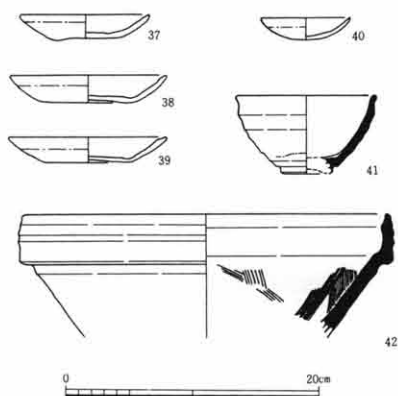
この遺跡では他に瓦質火舎や青磁碗、香炉、陶器鉢などが出土している。

(6) ^{いまくまの(注16)}今熊野城跡(宮津市成相寺)

山城の一つである。土師器皿38・39は洛外原型か模倣型である。おそらく16世紀前半と思われる。ただし、24のように少し器高の高いものや、平均口径が13.5cm



第6図 今熊野城跡出土遺物実測図
土師器：7～12・24・38・39
越前焼：27
青花磁器：32



第7図 宮津城跡 S K0630
出土遺物実測図

土師器：37～40 美濃・瀬戸：41
備前焼：42

程度なので、この時期の基準資料である山科寺内町段階よりは新しい様相である。越前焼鉢27は、口縁部内面を窪ませたものである。中国製青花磁器碗32はいわゆる蓮子(レンツー)碗である。

(7)宮津城跡(宮津市鶴賀)

宮津城は細川氏築城(1580年)の1期と、京極氏築城(1600年に丹後に入り、1623～1625年にはほぼ完成)の2期に分かれる。今回は「一之」と墨書された天目茶碗が出土したS K0630の資料を提示する。なお、「一之」とは細川氏の家臣沼田一之斎を指すと考えられている。

土師器皿37～40はてづくねで成形されている。39は洛外産土師器皿Iタイプの特徴を忠実に模倣したもので、16世紀後葉前半と考えている。天目茶碗は古瀬戸か。42の備前焼鉢はV期のものである。すなわち16世紀後半の資料とすることができる。

4. 丹後地域の編年

丹後地域の編年をする際、今回提示した資料だけでは足りないので、他の遺構出土資料も加味して考察したい。編年の基準としたものは、洛外産土師器皿である。

丹後地域の12～16世紀の土器群は9期に分けることができる。ただし、現在のところ1期(11世紀後半)の良好な資料は得られていない。

2期は黒色土器碗(丹後原型Bタイプが主体)・皿・杯、土師器皿Aタイプ・鍋(丹後原型Aタイプ)を主体とし、他に若干土師器杯・洛外模倣型皿や丹波原型瓦器碗、東播磨系須恵器鉢で構成されている。基準資料は加悦町桜内遺跡の古層で、12世紀前半を中心とする。

3期は黒色土器碗A・B・Cタイプがある。土師器皿は丹後原型Aタイプと洛外原型Jタイプの模倣型の2種がある。土師器鍋は鉄鍋の模倣の浅手があるが、この段階で山城原型鍋を模倣した鍋(竹野遺跡)が出現する。東播磨系須恵器鉢もある。なお、同安窯系青磁碗や竜泉窯系青磁碗(大山遺跡)、そして、中国南部産の白磁碗Ⅳ・Ⅴ類も出土する。基準資料は竹野遺跡Ⅰ-C-1地点、Ⅰ-D-1地点や、滝岡田古墳などで、12世紀後半を中心とする。

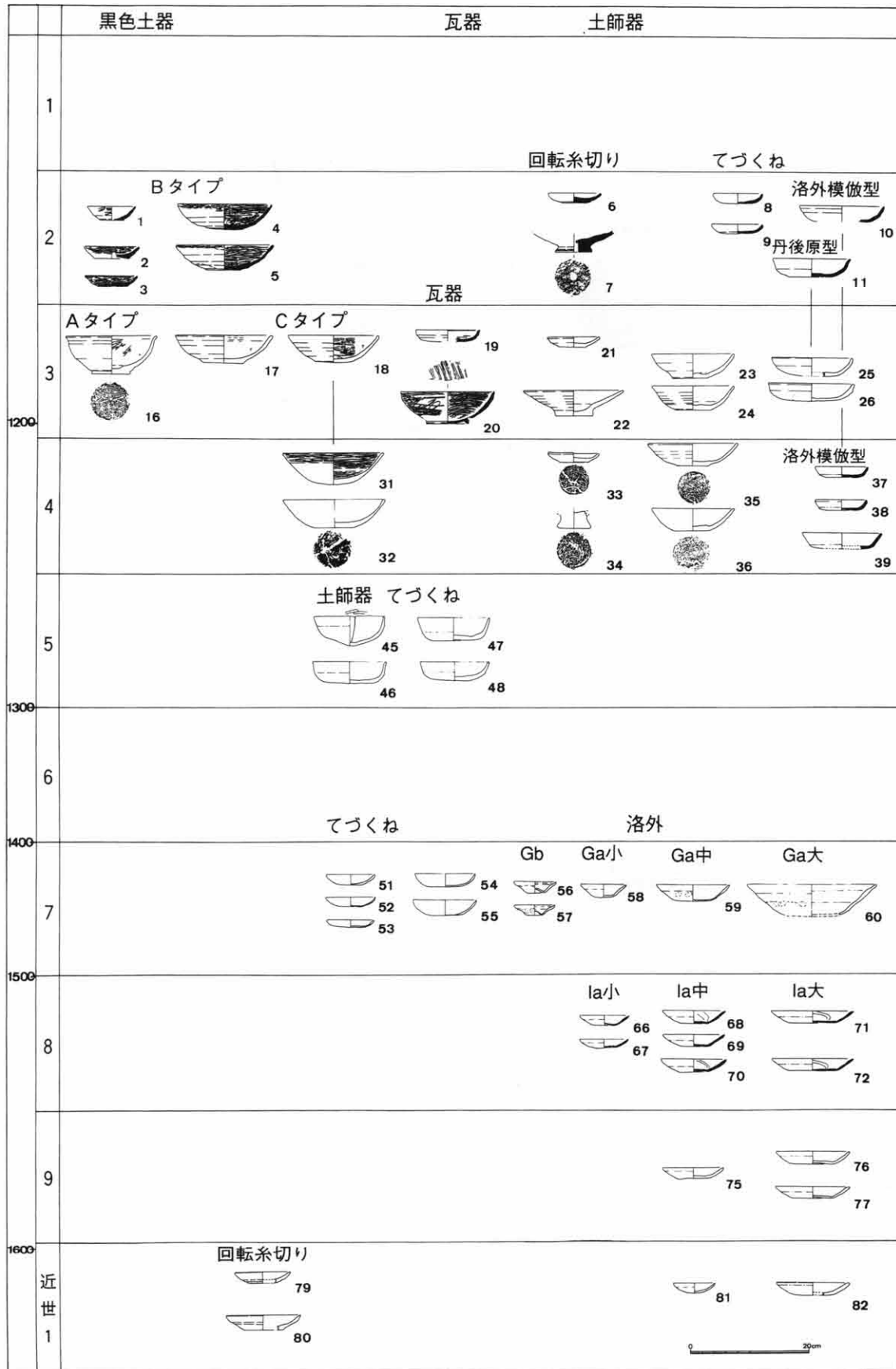
4期は黒色土器碗Cタイプが主体である。ここで越前系鉢も出現する。煮炊具としては土師器鍋・釜があり、これらは洛外模倣型が主体である。なお、中野遺跡F1区礫石下層出土の資料では、回転作用を利用した皿(丹後原型)がある。また、若干の柱状高台もある。基準資料は林遺跡1号溝で、13世紀前半を中心とする。

5期には黒色土器碗は消滅している。土師器皿は深手のもの(丹後原型Bタイプ)である。山城原型を模倣した羽釜が出土する。基準資料は林遺跡2号溝で、13世紀後半を中心とする。

6期は良好な資料に恵まれていない。

7期は土師器皿は丹後原型Cタイプ、洛外産土師器皿G a・G bタイプそのもの、もしくはこ

付表 丹後の中世土器編年表



	白磁・青磁	瓦器	土師器	須恵器
1				
2	12 13	洛外模倣型	丹後原型Aタイプ 14	15
3		27	28	土師質 29 30
4	40 41	須恵器	42	陶器 43 44
5	黄釉 49		洛外模倣型 50	
6				
7		61 62	63 64	越前 65
8	青花磁器 73			備前 74
9		瀬戸 78		
1600 近世 1		唐津 83	84	

0 20cm

れを模倣したものが出土する。私はG a・G bタイプは嵯峨の製品と考えており、Jタイプのよ
うな深草製品の影響はそれほど強くない。鍋は鉄鍋模倣の退化したものと、羽釜の鍔が退化した
ものがある。他に瓦器火舎、竜泉窯系青磁椀・香炉などが出土する。東播磨系は消滅している。
そのかわり越前焼系の鉢や瓦器鉢が増える。基準資料は中野遺跡井戸S E 82で、15世紀中葉頃で
ある。

8期は洛外産土師器皿Iタイプを模倣したものが出土する。図面上では原型との区別がつか
ないほど似ている。鉢は越前焼がある。青花磁器は蓮子(レンツ)椀や小杯がある。基準資料は今
熊野城跡で、16世紀前葉～中葉頃である。

9期は洛外産土師器皿Iタイプを模倣したものが出土する。天目茶椀や備前すり鉢(備前V期)
などがある。また、中国製青花磁器もある。基準資料は宮津城跡下層(S K 0630)で、16世紀後葉
である。

近世1期は土師器皿が回転作用を利用したものが出現し、てづくね製品を凌駕するようである。
唐津焼鉢・椀、越前焼鉢、丹波焼盤、土師質の焼塩壺などがある。また、中国製の青花磁器もあ
る。基準資料は宮津城跡上層で、17世紀前葉を中心とする。

5. まとめ

以上、12世紀から16世紀まで9期に分けた。これは大きく4様式にまとめることができる。

1様式 1期。おそらく丹後原型の黒色土器椀が出現する段階。

2様式 2～4期。丹後原型黒色土器椀全盛。末期にはCタイプに統一される。土師器皿は洛
外産の影響を受けたものと丹後原型とが共存。土師器鍋は丹後原型Aタイプが主体である。この
段階の後半には山城模倣型が出現する。中国製白磁椀IV・V類、同安窯・竜泉窯系青磁椀・皿あ
り。東播磨系須恵器鉢あり。

3様式 5期。土師器皿は丹後原型が主流である。土師器鍋は山城模倣型で、丹後原型はほぼ
消滅している。黒色土器は消滅している。鉢は東播磨系須恵器が主体であるが、この期を最後に
消滅する。

4様式 6～9期。土師器皿は洛外産を模倣したものが再出現する。大和原型瓦器火舎がある。
後半には蓮子(レンツ)椀などの中国製陶磁器が多数出土する。また、越前焼鉢や瓦器鉢が主体
となる。中世京都や大和(奈良)の影響が強く認められる段階である。さらに、各地の土器が出土
し、広域流通が盛んとなった段階でもある。

(いの・ちかとみ=当センター調査第2課調査第1係長)

注1 伊野近富「中世土器の編年(上)」(『京都府埋蔵文化財情報』第57号 (財)京都府埋蔵文化財調査研
究センター) 1995

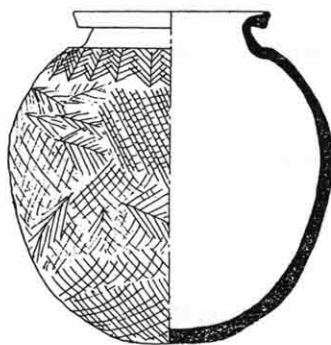
注2 高橋美久二『林遺跡発掘調査報告書』 網野町教育委員会 1977

注3 杉原和雄『中上司遺跡発掘調査報告書』 加悦町教育委員会 1979

- 注4 竹原一彦「丹後における黒色土器について」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注5 百瀬正恒「京都の土師器生産と搬入土師器」(『中世土器の基礎研究Ⅱ』 日本中世土器研究会) 1986
- 注6 岡田晃治「丹後出土の石鍋」(『太邇波考古』創刊号 両丹技師の会) 1982
- 注7 黒坪一樹・伊野近富「国道176号関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第54冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注8 百瀬正恒・近江俊秀「各地の様相 近畿」(『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会) 1995
- 注9 中嶋陽太郎他『特別展 城の考古学』 宮津市教育委員会 1988
- 注10 長谷川達『特別陳列 丹後・丹波出土の中国陶磁』 京都府立丹後郷土資料館 1994
- 注11 注7に同じ
- 注12 松村英之「滝岡田古墳出土の遺物」(『滝岡田古墳』 加悦町教育委員会) 1995
- 注13 平良泰久他『竹野遺跡』 丹後町教育委員会 1983
- 注14 注2に同じ
- 注15 中嶋陽太郎他『中野遺跡第4次発掘調査概要』 宮津市教育委員会 1983
- 注16 中嶋陽太郎他『阿弥陀ヶ峰城跡・今熊野城跡・今熊野遺跡』 宮津市教育委員会 1987
- 注17 中嶋陽太郎他『宮津城跡第3次発掘調査概要』 宮津市教育委員会 1985

補遺

前稿(伊野「中世土器の編年(上)」)で、不足していた須恵器壺の基準資料を呈示したい。



第8図 矢谷遺跡出土須恵器壺(1/6)

矢谷遺跡(天田郡夜久野町大字板生)

夜久野町の中心地、上夜久野から北へ約7kmの山間部で出土した須恵器壺である。赤土の地山に正位置で埋められていた。この中には和鏡1面と木製円板2枚が納められていた。壺の外表面は矢羽状のタタキ目が施されている。内表面はタタキの痕跡を残さないほどナデで仕上げられている。木板には墨で悪霊払いの文字が書かれており、更に「応永…」と判読できる部分があり、1400年頃には埋納されたらしい。

参考文献

衣川栄一「夜久野町板生出土の中世遺物」(『京都考古』第24号 京都考古刊行会) 1976

長岡京跡左京第366次調査の問題点

— 第4トレンチを中心にして —

小池 寛

1. はじめに

長岡京跡左京第366次調査は、昨年度に実施した左京第353次調査に引き続き、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した府営上植野団地(仮称)建設に伴う事前調査である(第1図)。

当該地は、長岡京跡左京四条一坊十町・十一町・十四町・十五町(旧呼称左京三条一坊十二町・十三町、四条一坊九町・十六町)推定地にあたり、当調査対象地内に東一坊坊間東小路(旧呼称東一坊第二小路)と四条条間小路(旧呼称三条大路)の交差点の所在が推定されている。

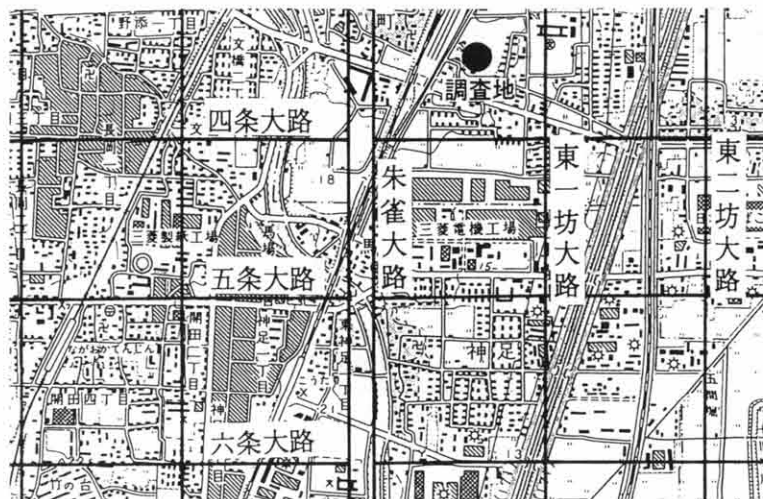
今年度の調査は、昨年度に実施した左京第353次調査地の周辺隣接地に合計8ヶ所のトレンチを設定し、古墳時代から中世に至る遺構・遺物の検出を行った。

調査は、調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同調査員小池 寛・竹下士郎が担当した。

なお、本稿は、左京第366次調査の概要報告が来年度に刊行される予定であるが、刊行までに一定期間あるため、その概要と問題点の指摘を主目的にしている。

2. 左京第353次調査の概観

昨年度実施した調査では、長岡京期から平安時代前期にかけて埋没した池沼S X 35306、東一坊坊間東小路の東西側溝、平安時代の掘立柱建物跡・流路状落ち込みS X 35317などを検出した。特に、S X 35317からは、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・越州青磁や吉志部瓦窯産の小型軒瓦、檜、建築用材などが出土した。また、須恵器には、転用硯が比較的多く見られ、「政所」「盛所」「造」などの墨書土器が見られることから、公的施設の所在を想起させる状況を示唆している。今後は、左京第266・252次で検出した掘立柱建物跡群とどのような併行関係があるのかを検討する作業を残している。



第1図 調査地位置図(1/50,000)

3. 調査の概要

今回の調査で検出した遺構・遺物は、耕作を示唆する中世素掘り溝群と小規模な掘立柱建物跡群で構成される平安時代後期の集落址、そして、条坊関連遺構と奈良時代流路跡、古墳時代前期の流路などである。以下、中世から古墳時代にかけて、その概観を行いたい。

中世 第4トレンチ北東区を中心とする平坦面に、南北方向と東西方向の素掘り溝を検出した。基本的には、南北方向が後に掘り込まれており、溝内から小破片の瓦器が出土している。一連の溝には、緩やかにカーブする溝も見られることから、水田区画の復元が可能である(第2図、写真1)。

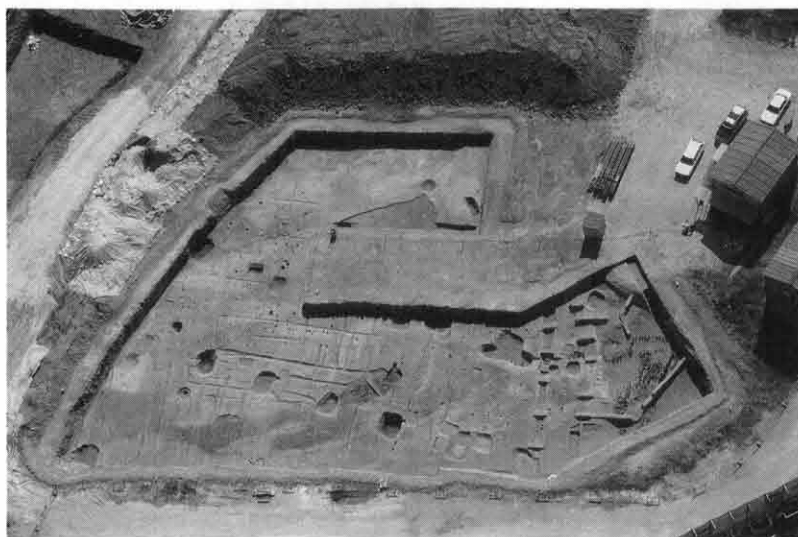
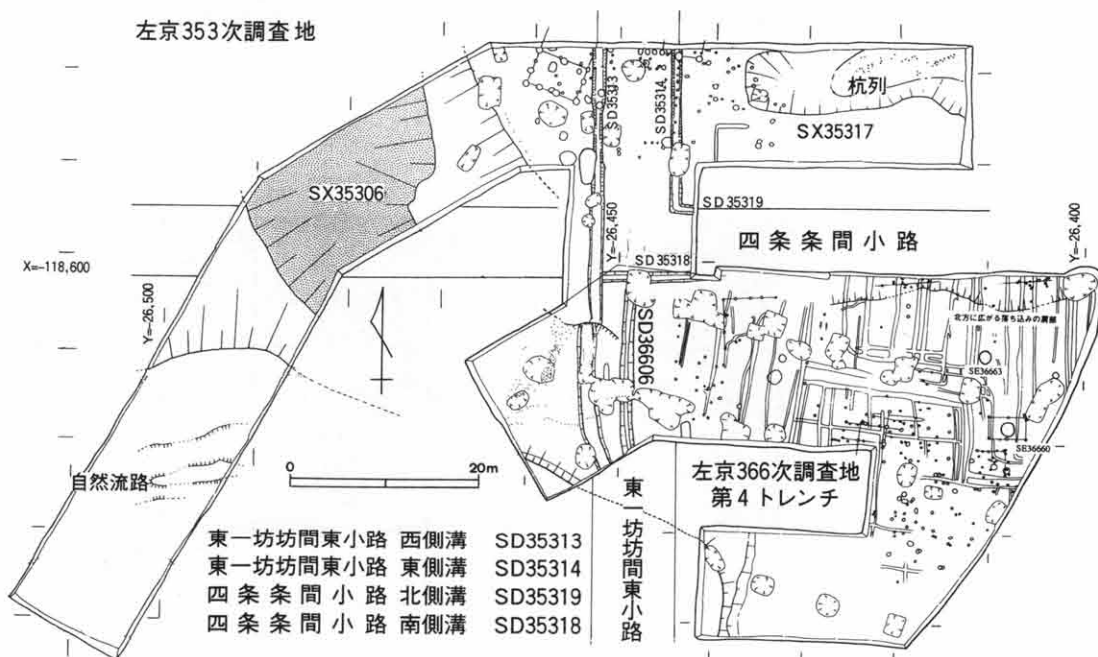


写真1 第4トレンチ平安～中世検出遺構完掘状況(下方が北)

平安時代 第4トレンチ北東区を中心に広がりを見せる小規模な掘立柱建物跡群と井戸2基、柵列などを検出した。検出した柱穴は、直径約30cm程度が大半であるが、現時点では正確に棟数等を把握するに至っていない。2基の井戸から出土した遺物から、11世紀前半を中心とする時期と11世紀末から12世紀初頭を中心と



第2図 左京第353・366次(第4トレンチ)平板測量図(1/800)
第4トレンチは、長岡京期～平安・鎌倉時代の検出遺構を图示

する時期の小規模集落が所在したことを示唆しており、中福知遺跡の広がりの実態を把握したと言える。なお、左京第353次調査で検出した小ピット群は、当初、瓦器小破片の出土から中世と推定したが、第4トレンチで検出したピット群と密接に関連する可能性がある。今後、検討を要する事項として認識しておきたい(第2図、写真1・2)。

長岡京期 東一坊坊間東小路と四条条間小路の交差点は、東一坊坊間東小路の東側溝 S D 35314が四条条間小路の北側溝 S D 35319と接続し、直角に東流している。また、西側溝 S D 35313は、南側溝 S D 35318を切り込んで南流していることを確認している。一方、四条条間小路の両側溝は、西側溝以西では確認しておらず、施工されなかったと考えて良い状況にある。その最大の要因は、交差点以西・以南の地形が、条坊施工には適していなかったと考えられる。なお、西側溝 S D 35313は、東側溝 S D 35314と比較すれば、溝幅も広く、残存状況も良好で、なおかつ、南側溝 S D 35318を切り込んで掘り込まれていることなどから、当該地以北に所在する平安時代の掘立柱建物跡群に伴う排水溝として改修された可能性が考えられる。

四条条間小路の南側溝 Y=-26,450m付近から南流する溝 S D 36606は、西隣接地点の落ち込みを回避するように掘られた溝であり、東一坊坊間東小路の路面幅を狭小化する目的を想像させる。しかし、地形に左右され、計画・施工を極端に変更することが検出例として認められていない現状では、更に、諸類例を集成し、検討を要する課題である(巻頭図版第1-(1))。

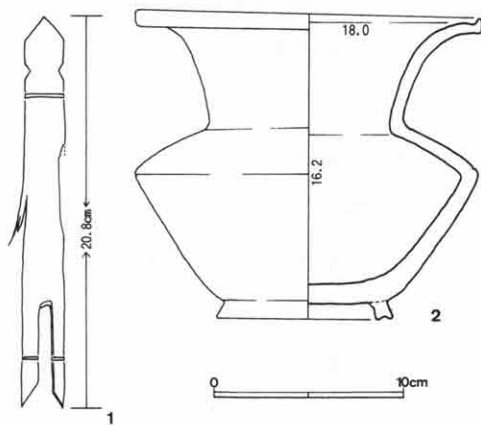
奈良時代 長岡京期から中世に至る遺構検出面はほぼ同一面であるが、その堆積層の濁黄褐色土を30~40cm掘り下げた段階で、下層の流路を検出した。流路底部が流水により船底状を呈しており、砂礫が厚く堆積している。その砂礫層上面で腐蝕した杭の頭部を検出した。杭群は、概ね2群に分類できる。まず、第4トレンチ西方では、北から東へ57°の主軸をもつ流路 S X 35304がある。流路内堆積土は砂礫であるが、両岸をしがらみ状に打ち込んだ杭群より護岸している。また、この流路の西端では、直径20~30cm前後の丸太材を流路の主軸と同一方向に埋置する。この流路は、その主軸方向を北から東へ約90°振ったのち、更に、東方へ流れており、トレンチ北東端で検出した杭群から奈良時代に比定できる須恵器・壺Qと人形を検出した。一方、北から東へ78°の方向に直線的に打ち込まれた杭列 S X 36675は、ほぼトレンチ西端から東端に達しており、その距離は、約65mを測る。当該杭列で最も特徴的な状態としては、直線的に打ち込まれた杭列から南東方向にのみ枝状に杭



写真2 平安時代後期、井戸36663断割状況(西から)

を打ち込んでいる点にある。枝状杭列の基本的な長さは5mであり、やや湾曲した弧状を呈している。腐蝕した杭の頭部を検出した砂礫層は、既に杭を打ち込む段階での堆積層と考えられるため、本来の杭の用途を知ることができる上半部は消失しているが、枝状杭列が西南方向から北東方向の流水を意識して打ち込まれたことは、直線的に打ち込まれた杭列の方向からも肯首できる。おそらく、不規則に打ち込むことで護岸を行った奈良時代流路S X 35304の流れを規制し、一定方向の流水を確保する目的で、打ち込まれたと考えられる(第3・4図)。

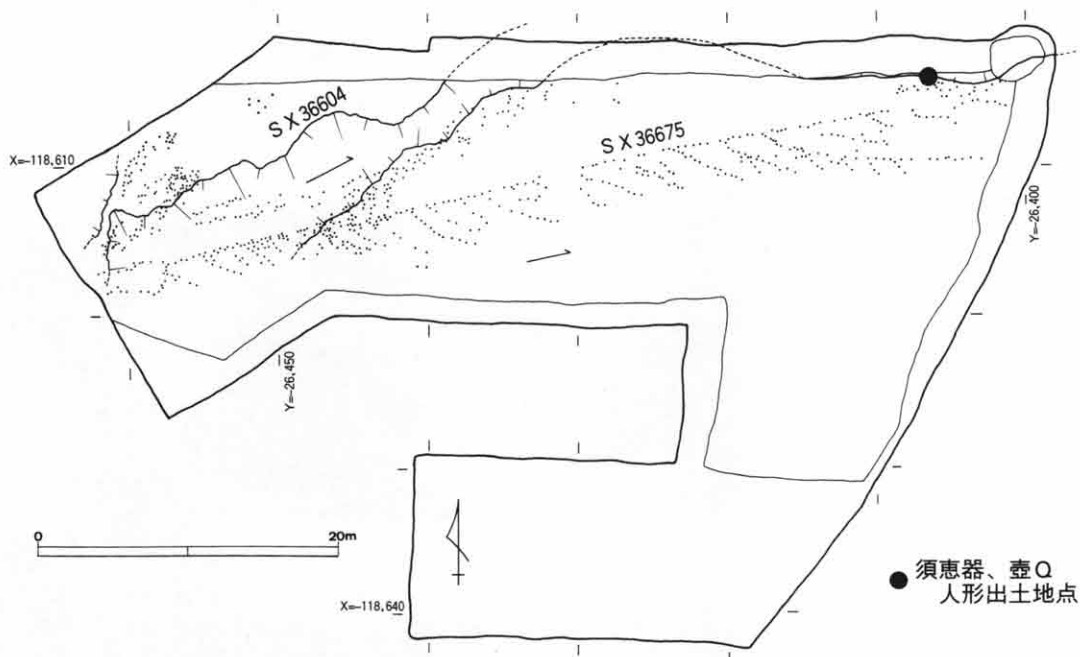
これらの杭列は、東方に設定した第5トレンチでも検出している。また、1974~1975年に実施された向陽高校建設に伴う発掘調査でも、同様な杭群が確認されており、それらの総延長は300mにも及ぶ。長岡京期以前に旧小畑川の氾濫を大規模な土木工事により規制し、河川改修を実施



第3図 出土遺物実測図(1/4)
奈良時代、杭列内出土

している事実は、周辺に大規模集落の検出が認められていない現状では、長岡京造営との関連を想起させる。今後、当該地の東西方向における事例が増加すれば、杭群のもつ意義が、さらに明らかになるものと確信している(巻頭図版第1-(2))。

古墳時代 杭群頭部を検出した砂礫層を除去し、その下層に堆積する淡黒褐色粘土上面において、古墳時代前期の特徴をもつ古式土師器片を確認した。この粘土は、杭群の打ち込まれた基盤層でもあり、概ね50~60cmの厚みを測る。土層堆積状況を詳細に見ると、淡黒褐色粘土中には、細

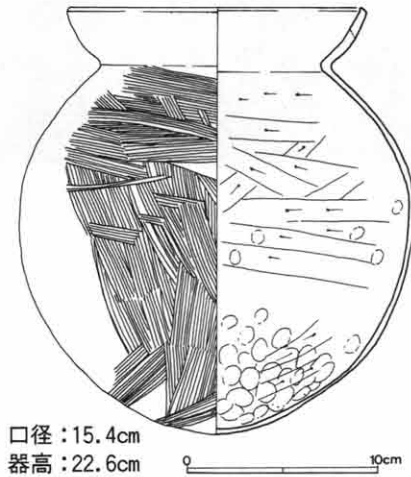


第4図 左京第366次(第4トレンチ)奈良時代、杭列検出状況平板測量図(1/500)

砂・極細砂層が確認できることから、度重なる小規模な氾濫とともに一定期間の安定した状態を想定することができる。

古墳時代に属する遺構としては、北西から南東方向に屈曲しながら流れ、ほぼ主軸を南方に向けるS D36671や、S D36671が埋没して以後、断面形態が長方形を呈するように掘り込まれたS D36673、土坑・ピット・馬蹄形を呈する不明土坑などがある。特に、S D36671を切り込んで掘られたS D36673の埋土は、淡黄緑色砂であり、上流域において発生した氾濫が原因で埋没したことを示唆している。これらから旧小畑川の氾濫が古墳時代前期にもあったことが理解できる(写真3)。

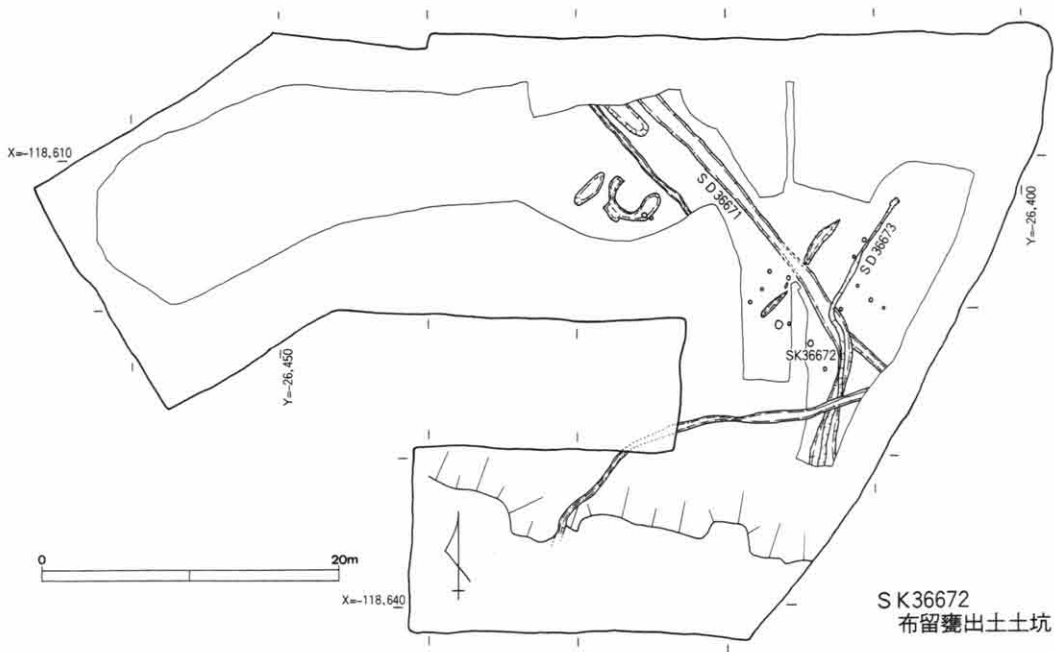
第5図に図示した古式土師器は、布留古段階に比定できる土器であり、土坑S K36672に完形の状態で横置されており、土器内部に穀物の種子が多量に納められていた。今回、検出した溝S D36671・S D36673などからは、古式土師器の小破片が出土しているが、時間的には土坑S K36672と同時期と見て良い状況にある。なお、これらの遺構群からは、正確に目途などを把握することはできないが、農業生産に係わる施設と考えておきたい(第5・6図)。



第5図 S K36672出土布留甕
実測図(1/4)
復元途中の実測であり、
内外面調整痕図化は未完

4. 調査成果と問題点

当該調査では、中世から古墳時代前期にかけての遺



第6図 左京第366次(第4トレンチ)古墳時代前期検出遺構平板測量図(1/500)



写真3 第4トレンチ古墳時代流路検出状況(概ね南から)

構・遺物を検出したが、各時代毎に提起する問題点は、多岐にわたっている。ここでは、その問題点を時期毎に抽出し、まとめにかえたい。

当該調査地は、既知の遺跡で捉えると中福知遺跡の範疇に入れることができる。中福知遺跡は、現在、平安時代前期から集落が形成され、同末期から鎌倉時

代にかけて水田化が想定されている。今回の調査でも、先述したように11世紀から12世紀にかけて小規模ながら集落を形成していたことが判明しており、鎌倉時代に水田化していることを確認した。そのことから、当該調査地を、中福知遺跡の範疇に入れることが妥当であり、また、左京第252次検出の総柱建物群も、平安末期の可能性を指摘しておきたい。

一方、長岡京に関する調査成果としては、東一坊坊間東小路と四条条間小路の交差点の確認がある。西側溝が平安時代に排水溝として掘り直されていることから、条坊の側溝としての復元は正確に行えないが、東一坊坊間東小路の東側溝と四条条間小路の北側溝が接続して東流していることを勘案すれば、南側溝と接続し、東流していたことも考えられる。いずれにしても交差点の西南範囲には、池沼等の存在が確認されており、施工には何らかの影響を及ぼしたことは容易に想像できる。これについても、調査事例の集成から慎重に検討を行いたい。

奈良時代では、流路及び改修を示唆する杭列(群)を検出した。杭は、概ね800本を数えており、大規模な土木工事が想定できる。先述したように、東方地点での検出例をあわせると300m以上の距離を測ることができる。従来、これらの施設を灌漑用の水路維持の目的と解釈されてきたが、総延長300mを超える範囲に想定できることと周辺に奈良時代の集落が確認されていないことを考え合わせると、長岡京造営の施工との関連も視野に入れる必要がある。

最後に古墳時代前期に属する検出遺構は、集落的様相と考えるよりも農業生産に関連する遺構と見る方が蓋然性が高い状況を呈している。周辺地域では、鴨田遺跡・芝ヶ本遺跡が時期的に併行関係にある。鴨田遺跡と当該地の間には、旧小畑川のある時期の流路(現・外環状線付近)が推定されており、地形的には、芝ヶ本遺跡との関連が想定できる。

以上が現状で考えられる問題点であるが、出土遺物の詳細な検討により、正確な年代幅の認定を行った上で、更に、問題点を深く掘り下げてゆきたい。また、本稿を、概要報告作成までの整理作業の指針としておきたい。

(こいけ・ひろし=当センター調査第2課調査第2係調査員)

弓田遺跡の発掘調査

橋本 稔

1. はじめに

今回の調査は、国道24号京奈道路建設に先立ち、建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所の依頼を受け実施した。調査地は、京都府相楽郡木津町大字市坂に所在し、京都府と奈良県の府県境に近い、木津町南端部の水田地帯に立地する。弓田遺跡の東側の丘陵地帯には、瓦谷古墳群をはじめ、西山古墳、市坂古墳群などの古墳時代前期から中期(4世紀～5世紀)の古墳や埴輪窯跡が築かれ、また、奈良時代には、上人ヶ平遺跡や市坂瓦窯など、平城宮の瓦を生産した大規模な官営工房が営まれていた。

弓田遺跡は、昨年度に道路予定域の試掘調査を行い、その結果、遺構や遺物が確認されたうち、東側にあたるA地区の発掘調査を実施した。A地区の調査では、縄文時代晩期の土器片をはじめ、弥生時代後期から平安時代にかけての溝跡や掘立柱建物跡、井戸跡などがみつまっている。今年度は、西側にあたるB地区を対象に発掘調査を実施した。調査の途中で、埴輪や土器類を多量に含む古墳時代の溝が現工食用道路の下に広がるのが判明したため、一部拡張して調査を行った。

なお、調査は平成7年4月18日～同年11月22日の期間で実施し、調査面積は3,700m²である。

2. 調査の概要

調査は、京奈道路予定地内の長さ約140m・幅約33mの範囲で実施した。調査地の南東では、主に奈良時代の遺構中央から北西にかけては、主に古墳時代の遺構を中心にほぼ同一面で検出した。以下、各時期の遺構について簡単に述べる。



第1図 調査地位置図(1/50,000)

(1)古墳時代後期

竪穴式住居跡1 一辺4.7m×4.4mの平面方形で、深さ8cmを測る。床面には、土師器片が少量散在していた。柱跡は不明で、竈や炉跡など火を使用した痕跡は認められなかった。

竪穴式住居跡2 一辺5.3m×4.1mの方形で、深さ5cmを測る。床面から土師器・須恵器・埴輪の破片が少量出土した。床面から柱跡となる4本の柱穴を検出したが、竈はなかった。建てられた時期は、6世紀前半頃と考えられる。

溝1 幅3～4m・深さ50～70cmの南北方向の溝で北流する。溝の西肩や溝中から土師器、須恵器、形象埴輪を含む埴輪類、木製の樋、梯子などが出土した。溝の存続時期は6世紀初頭から後半と思われる。

溝2 幅40～60cm・深さ15～25cmの南北方向に北流する浅い溝で、溝内から土師器・須恵器・埴輪が出土した。南端で溝1に合流するが、溝1に先行する溝である。時期は6世紀初頭である。

溝3 幅約70cm・深さ40cmを測る、東西方向に直線的にのび、東端で「L」字に北に曲がる溝である。溝中に遺物はなく、溝が埋まった上面から土師器が出土した。西端で溝1に合流するが、同時に機能した溝かは不明である。6世紀初頭と思われる。

溝4 幅25～40cm・深さ5～25cmを測る浅い溝で、南北方向に流れ、竪穴式住居跡1付近で蛇行して南流する。溝中の遺物は少なく、若干の土師器片が出土したのみである。

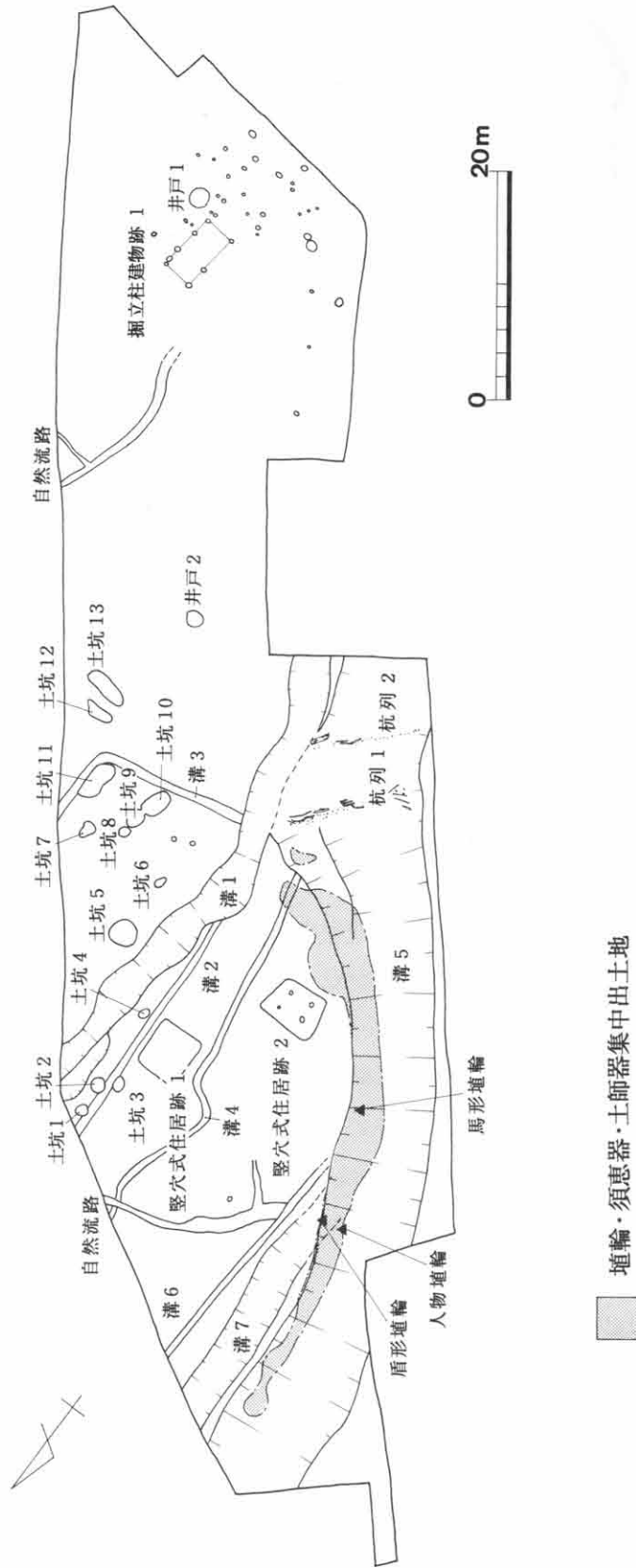
溝5 幅25～40cm・深さ約1.5mを測る、南北方向の溝または流路で、北流する。溝の東の肩部斜面の幅2～3m・南北約60mにわたり、土師器・須恵器や形象埴輪を含む埴輪類が密集した状況で出土した。破片がほとんどであるが、中には全体の形を残すものもみられた。溝内の出土遺物としては、このほか、ミニチュア土器(手捏ね土器)・棒状や板状の木製品・滑石製白玉・土錘・製塩土器・種子などがある。また、溝の肩部にそって杭列が一部残り、溝1と合流する南側部分には後述する杭列1・2の堰と思われる水利施設が設けられていた。



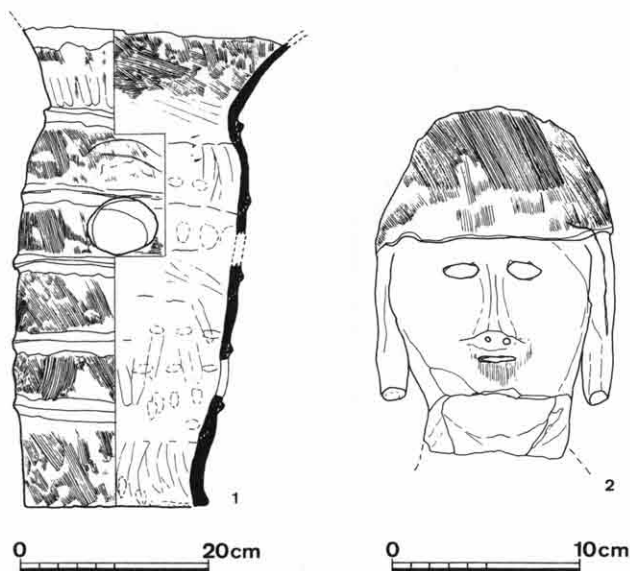
写真1 人物埴輪(西から)



写真2 盾形埴輪(石見型、南から)



第2図 検出遺構(略図)



第3図 埴輪実測図
1. 朝顔形埴輪 2. 人物埴輪

じり、埴輪片が出土した。

杭列(堰跡) 1 溝5をさえぎるように東西方向に延びる杭列を約9mにわたって検出した。各杭の直径は4~5cm、高さは約30cmである。この杭列の東側では、杭に沿って板材や棒材を組み合わせ合わせており、溝5の流れをせき止めるための堰跡と思われる。

杭列(堰跡) 2 杭列1の南側で南北方向に長さ約5mにわたって検出した。直径4~5cmの杭を使用し、杭列の南面には、葦と思われる植物の茎が、溝の底から杭にかけて縦方向に約1mの幅で敷き並べられていた。これらは、水をせき止めるための施設と思われる。この杭列の北側には、導水の施設と考えられるくり抜きの木樋が残っていた。

(2) 奈良時代

掘立柱建物跡 1 南北方向の建物跡で、梁間1間(3m)×桁行3間(1.5~2m)を測る。

井戸 1 平面形は直径1.8mの円形で、深さ1.8mの掘り鉢状をしている。上面から45cmの深さで、井戸枠を検出した。井戸枠の下には、深さ85cmにわたり3段の曲げ物を使った井筒が残っていた。

(3) その他

溝 6 最近まで存続した用水の溝である。

溝 7 幅2m・深さ40cmの舟形の断面をなす南北方向の溝である。溝5よりも新しい溝ではあるが、出土遺物はなく、詳しい時期は不明である。

井戸 2 平面円形で、掘り鉢状の素掘りの井戸跡で、遺物はなく、近代以降の野井戸と思われる。

土坑 7~13 いずれの土坑も砂が詰まり、土坑10から瓦器片が出土した。性格は不明であるが、中世の土坑群と思われる。

3. 出土遺物

今回の調査では、多種多量にのぼる遺物が出土しており、コンテナにして約170箱を数える。

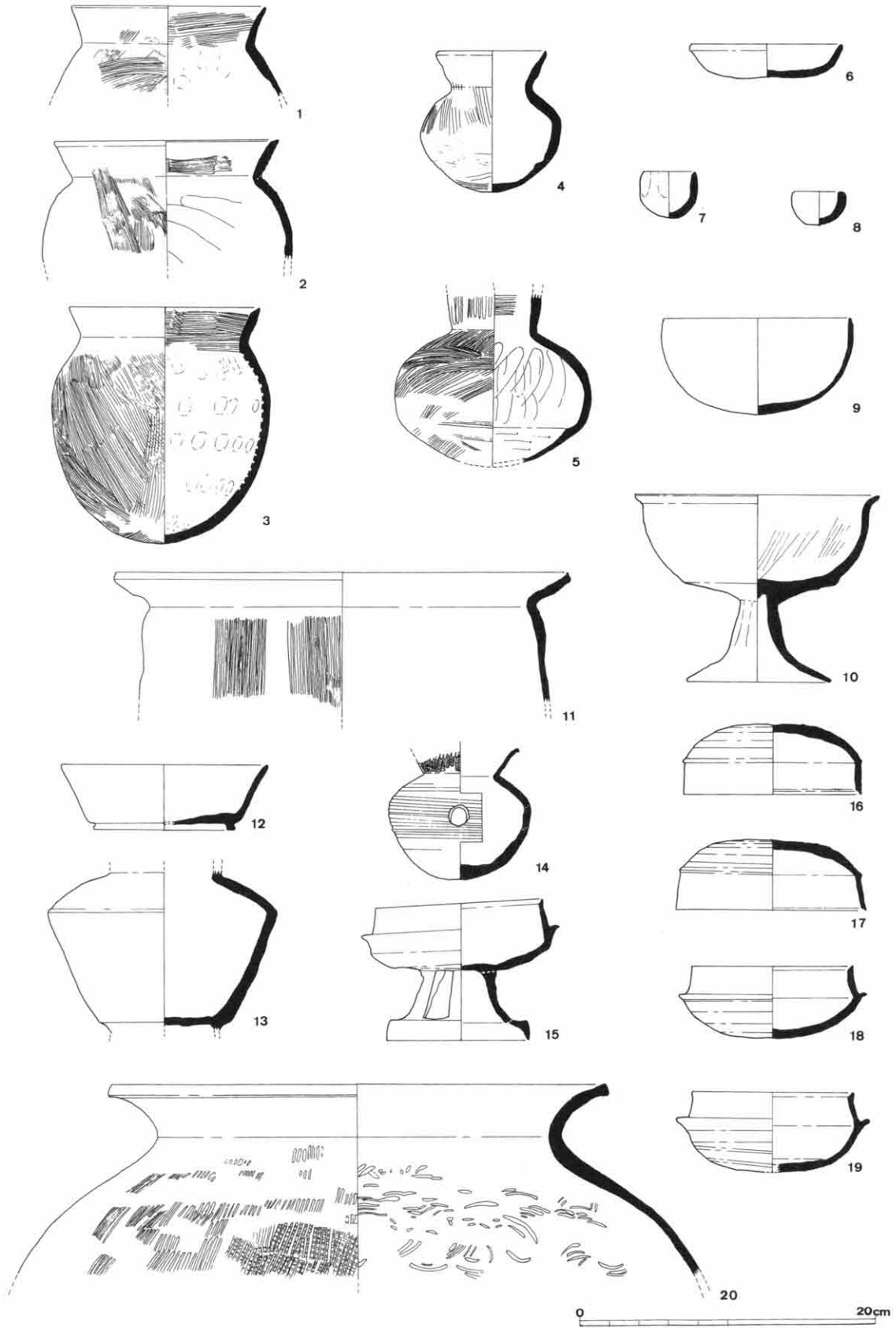
土坑 1 長径1m×短径0.8m・深さ40cmの楕円形の土坑で、中から埴輪・土師器が出土した。

土坑 2・3 長径1.0~1.3m×短径0.9~1.2mの楕円形の土坑で、中から少量の土師器片が出土した。

土坑 4 長径1m・短径0.6mの楕円形で、土師器が出土した。

土坑 5 長径2.5m・深さ8cmの浅い皿状の土坑で、埋土に炭が混じり、土師器片が多数出土した。

土坑 6 一辺1.3m・深さ20cmのほぼ三角形の土坑で、埋土に炭が混



第4図 出土土器実測図

1~11. 土師器(7・8. ミニチュア土器) 12~20. 須恵器

2・7・8・14. 溝1出土、1・3~5・9~11・15~19. 溝5出土、6・12・13・20. 井戸1出土

出土遺物の大半は、溝5から出土した埴輪・土器類が占めている。ここでは、各時期の出土遺物の種類についてのみ簡単に列記しておく。

古墳時代：須恵器(杯・高杯・甕・甗など)

土師器(杯・高杯・壺・甕・移動式竈・甑など)

円筒埴輪、形象埴輪(馬・人物・家・蓋・盾など(石見型))

木製品(榧・梯子・板材・杭など)

<その他>

ミニチュア土器(手捏ね土器壺・椀など)、滑石製白玉、製塩土器、土錘、種子など

奈良時代：須恵器(甕・杯・長頸壺など)

土師器(甕など)

曲物

その他 瓦器・陶磁器類。

4. まとめ

以下、今回の調査成果をまとめておく。

弓田遺跡の2次にわたる調査では、縄文・弥生時代から古墳、奈良、中・近世に至る各時期の遺構や遺物がみつまっている。木津川南部の平野部では、まとまった面積をもった発掘調査の例が少なく、この地域の開発の歴史を考えるうえで貴重な資料を提供するものである。

今回の調査では、古墳時代後期の方形竪穴式住居跡2基や溝跡群・土坑・堰跡などがみつまっている。特に、溝5からは、多量の埴輪類のほか、須恵器や土師器などの土器類、木器、祭祀遺物(ミニチュア土器・滑石製玉類)、種子などが、東側の肩部を中心に密集して出土した。

埴輪には、通常円筒埴輪のほか、人物・馬・家・蓋・盾(石見型)などの形象埴輪がある。埴輪や須恵器の型式編年から、これらは、5世紀末から6世紀はじめに製作されたと考えられる。

埴輪の出土状況からみて、(A)付近に古墳があった、ということも考えられる。しかし、溝の形や、須恵器や土師器など、集落で使われる土器が多く混じっていることなどから、(B)ここで埴輪の生産が行われ、また、集落が近くにあったと考える説が妥当と思われる。しかし、今回の調査範囲の中では、埴輪を焼いた窯跡などはみつかっていないし、地形的に見ても丘陵の痕跡を確認できないから、B説についても確定はできない。そして、これらの埴輪が他の場所へ運ばれたものとするれば、どの古墳に運ばれたか、また、東側の丘陵にある瓦谷や上人ヶ平遺跡などのやや古い時期にさかのぼる埴輪窯との関連についても、今後詳しく検討していきたい。

奈良時代の建物跡は、1棟みつまっているが、まとまりがなく、詳しいことはわからない。しかし、井戸枠に利用されていた曲物は大型品であり、集落の立地からみても、官営の瓦工房である上人ヶ平遺跡や奈良山丘陵を越えた平城京との関連なども考えるべきかもしれない。

(はしもと・みのる=当センター調査第2課調査第3係調査補佐員)

理論考古学の節度

河野一隆

1. はじめに

今世紀後半の政治・経済的諸条件およびそれを土台として展開する意識諸形態に影響されて、考古学が変質過程にある事実は、多かれ少なかれ、研究者自身が認識しているところである。これを転換期の考古学と呼ぶことが許されるならば、それが目指すものは何か。その解答は一律ではないだろう。だが、程度の差はあっても、文化史的考古学^(注1)に対して、限界あるいは物足りなさを痛感する考古学研究者がいることも事実である。かつて、D.L.クラークは、それを「無垢の喪失(loss of innocence)」と呼んだ。考古学は無邪気な世代から、科学的に成熟した年齢に到達し、自らの方法論の客観性を検討し直すべき時期が来たというのである。これが「新しい考古学(new archaeology)」運動の旗頭であった。この洗礼を受けた英米国では、1970年を境として、従来の「規範的」、いや文化史的考古学と同時にそれに対して批判的な、非歴史的つまり人類学的な文化観に立つ「考古学」をも意識せざるを得なくなった。文化史的考古学というのは、例えば遺跡・遺物を年代順に並べて縦軸を構成し、地域的、質的な変化を把握し、政治的変容、経済的諸条件、環境変化などの結論を帰納的に導き出すものである。これが人文科学としての考古学のスタイルであった。現在に到るまで進行中の変化は、物質的資料から過去を復元するための、この古典的な、言い換えれば経験主義的な手続きからの訣別に他ならない。ところが、欧州の「新しい考古学」、あるいはその主流を継承したプロセス考古学は、ポスト構造主義やフランクフルト学派から多くを取り入れて、方法論的にはより自省的なものへと変質したのである。これはポスト・プロセス考古学と呼ばれ、研究者が生きる時代や文化による拘束、ないしは個人的な経験さえも加味した考古学の実践を主唱している。その中でもラディカルな一端が欧州TAGに代表される「理論考古学派(Theoretical Archaeological Group)」であり、考古学の理論的側面を重視し、それが明らかにする過去の意味を歴史的過程の中で問い直す動きなのである。本稿は、理論考古学の視点から、最近刊行された2冊の本を私見を交えて紹介し、展望を模索したい。

2. K.R.ダークの『理論考古学』

Journal of Theoretical Archaeology(理論考古学雑誌)の編者であるK.R.ダークは、*Theoretical Archaeology*(理論考古学)を著わし、考古学の理論と実践例を簡潔にまとめている^(注2)。序文にあるとおり、これは考古学以外の研究者、あるいはアマチュアに向けて書かれた理論考古学の格好の入門書であり、巻末に付された用語解説だけでも非常に有益だ。本書では、冒頭で考

古学の目的が議論される。「考古学は考古学である (Archaeology is archeology)」という伝統的な定義を超えて、「文学としての考古学」、「科学または芸術としての考古学」などの、新たなあるいは従来までは比重が低かった領域が示される。比較のために言えば、R. J. ウェンケは1984年に刊行された *Patterns in Prehistory* (先史学の^(注3)類型) にあって、考古学の目的として(1)文化史の編纂、(2)古代人の生活方法の復原、(3)文化的プロセスの記述と分類の3点を挙げ、多分にプロセス考古学の色を帯びていた。現代では、さらに考古学の目的が分化、多様化し、複合化したことに議論の余地は無いが、その中で何を主眼とするかで研究者の議論が分かれるのは当然である。例えば、「ホークスの推論の階梯 (C. ホークスによる考古学の研究対象の階層的^(注4)整理)」にしても、これを認めるか否かで分析方法から結論まで異なるだろう。

続いて、ダークは具体的な推論の方法、遺物の分類・年代決定について触れる。本書の性格として網羅的になっており、詳細な検討は各論に譲るのは仕方がない。ただ、この部分で感じたのは、考古学者は、実のところ何を必要として資料操作をするのか、単なる切り口のおもしろさ以上の、歴史叙述の本体を見据えた、批判的な読みとりが要求されるということである。プロセス考古学の功罪は多々論じられているが、論理実証主義を土台とした分析基準の再検証、とりわけ数量的分析方法の衝撃が、考古学研究者の対象へ接近する姿勢に、厳然たる変更を迫ったことは事実である。だが、最後にダークが言うように、考古学の論理や用語を規定するものは他でもなく理論なのだから。

考古学における理論が、現代思想を鋭敏に反映ないしはその余波を受けて、考古学の目的の多様化をもたらしたという理論考古学派の理解に立つならば、目的に応じた領域の分化がおこるのは必然である。いわゆる「〇〇考古学」の乱立は最近のことではないが、その中でダークは「社会考古学」、「経済考古学」、「認知考古学」の三者を論評している。これらは、日本でも断片的に紹介されており、全くなじみのないものではなくなっている。だが、かといってこれらが文化史的考古学に置き換わるほどではない。例えば、松本直子が評する^(注5)ように、C. レンフルーとE. ズブラウ編『古代の心—認知考古学の諸要素—』^(注6)は認知考古学の射程を示す有益なものであるが、これを読むと、方法論的な成熟はまだまだという観がある。現状の「認知考古学」が、かつてその兄貴分であるプロセス考古学が規範的と批判した文化史的考古学と似て非なるものになるのではないかという危惧は私だけであろうか。これらの考古学の新領域がその斬新さとは対照的に、主流となりにくい理由は、理論考古学の諸概念が、学際的領域、言い換えれば自然科学、社会科学、あるいは認知科学の理論的テーマから抽出ないしは構成されていて、考古学プロパーの文化史的な考古学の成果に見合うだけのオリジナリティがあるという確信が持てないからだと考える。それが今後の課題であるというなら、皮肉な言い方をすれば、プロセス考古学的な、人間は所与の条件下で効用あるいは利潤を最大化するよう合理的に行動するという人間観に立つとしたら、そのような新領域に立ち入ることには少なくとも躊躇するはずである。一步、踏み誤れば考古学から逸脱し、それを放棄してしまうことにもなりかねない。したがって、理論考古学の刃は自分自身にも向けられているのであって、その実験こそが醍醐味なのかもしれないが、ただそれ

だけでは一過性のキャンペーンに終わってしまうだろう。最終章でダークはプロセス考古学以来の懸案である「文化変化の説明」に取り組む。この中で挙げられた19の説明は、確かに多岐にわたるけれども、一体、いくつが残るだろうか。その淘汰が完了したときに、理論考古学は一人立ちをしたと言えなくもないだろう。

3. サザンプトンの「世界的な日」

ダークの書は理論考古学の概説書であるが、どちらかと言えば、プロセス考古学の立場から書かれている。これに対して、ポスト・プロセス考古学の世界的動向をうかがうことができるのが P. J. ウッコー編 *Theory in Archaeology—A world perspective—*(考古学の理論—世界的展望—) ^(注7)である。

ポスト・プロセス考古学は、考古学の認識論、論理構造、形而上学的問題を対象とする。かつて象徴考古学と呼ばれたこともあったが、安齋正人によれば、^(注8)トマス・パターソンを引いて、^(注9)3つの流れを分別している。第1は、I. ホッダーを代表とするもので、考古資料を一種のテキストと捉え、現代を取り巻く諸環境が解読者である考古学者を結びつけている。第2は、M. シャンクスとC. テイリィらのもので、考古学は現在に関わる、あるいは現在に過去を関連づける行為であるという実在論的立場にある。これに対しては、穴沢啄光による痛烈な批判がある。^(注10)第3は、M. レオーネらの流れで、考古学は過去の人間の行為を規制するイデオロギーと社会的意識形態を考察することで、考古学者は自らの分析的カテゴリーを批判的に捉えるべきだと主唱する。現在のポスト・プロセス考古学は、必ずしもこの3者に該当する訳ではないけれども、以前にも増して現代を意識した姿勢が、考古学研究者に要求されるようになったことは事実である。

1992年12月14日から16日にかけて、英国サザンプトン大学で理論考古学の学会が実施された。これは、主としてヨーロッパの理論考古学を「外から」評価することが目的であったが、世界各国の考古学研究者による報告は、この学会が文字通り「世界的な日」として位置付けられたことを意味していた。この学会の報告が文章化されたものが本書である。付表1に概要を示す。詳細は触れないが、その動向は以下の4つにまとめられよう。第1は正統派ポスト・プロセス考古学で、英・米を代表とする。第2はドイツが属する実証主義派で、ランケの歴史主義から派生したものである。第3は、象徴・構造主義派で、アナル学派の全体史志向に対応したもので、ロビンソンクルーソーとフライディの歴史意識を比較したL. オリヴィアとA. クダールのように、歴史の時間意識と環境に焦点を当てる。第4は民族・国家主義派で、次の2つが分別される。その1つはロシアのように、社会主義政権のイデオロギーであった史的唯物論による歴史の枠組みが、1989年の東欧革命を機に崩壊し、ポスト冷戦下の民族主義の昂揚に考古学が呼応したものである。もう1つは、いわゆる第三世界で、植民地時代の宗主国の考古学テーゼを克服し、自らの国家アイデンティティの形成に対して、考古学にも一定の役割を与えようという動きである。だが、ダウド・タヌディーヨがまとめたインドネシアの考古学のように、新たな道を模索した結果、米英のプロセス考古学に後退した例もある。本書を読むと、各国の歴史性に根ざした理論の多様性とそ

付表1 サザンプトン大学における理論考古学の学会の内容

	タイトル	著者
	Introduction: archaeological interpretation in a world context	Peter J. Ucko
1	Great Zimbabwe and the Lost City: the cultural colonization of the South African past	Martin Hall
2	The Hun is a methodical chap': reflections on the German tradition of pre- and proto-history	Heinrich Härke
3	Theoretical trends in Indonesian archaeology	Daud A. Tanudirjo
4	Theory, practice and criticism in the history of Namibian archaeology	John Kinahan
5	European encumbrances to the development of relevant theory in African archaeology	Bassey W. Andah
6	Theoretical perspectives in Indian archaeology: an historical review	K. Paddayya
7	The 'Aboriginalization' of Australian archaeology: the contribution of the Australian Institute of Aboriginal Studies to the indigenous transformation of the discipline	Stephanie Moser
8	Prehistory in a multicultural state: a commentary on the development of Canadian archaeology	Quentin Mackie
9	The socio-politics of the development of archaeology in Hispanic South America	Gustavo Politis
10	Mixed features of archaeological theory in Brazil	Pedro Paulo A. Funari
11	Theoretical underpinnings of Portuguese archaeology in the twentieth century	Vitor Oliveira Susana Oliveira Jorge
12	Theory and practice in Irish archaeology	Gabriel Cooney
13	Who possesses Tara?: politics in archaeology in Ireland	Peter C. Woodman
14	Archaeological theory in Japan	Hiroshi Tsude
15	Archaeology against the state: roots of internationalism	Christopher Evans
16	Archaeology in Russia and its impact on archaeological theory	Pavel M. Dolukhanov
17	Where are we now?: archaeological theory in the 1990s	Julian Thomas
18	French tradition and the central place of history in the human sciences: preamble to a dialogue between Robinson Crusoe and his Man Friday	Laurent Olivier Anick Coudart

の衝突に強く印象づけられるが、分裂傾向が現在も進行中であることは否めない。例えば、マーティン・ホールによるジムバブウェの報告では、ポスト・プロセス考古学の面目躍如たるところがある。

4. 中国考古学と理論考古学

以上の思潮に対して、独自の考古学の伝統を持ちながらも静観しているのが中国考古学である。その主流となるのは、文化史的考古学であり、本誌に翻訳が掲載された杜正勝「考古学与中国古代史研究^(注11)」に代表されるような、文献資料と相補的に歴史研究を構成するという伝統的な考古学観である。もっとも、俞偉超・張愛永が「考古学新理解論綱」に「全息論」としてプロセス考古学のシステム論を紹介したように、理論考古学への意識はあるようだ。だが、ポスト・プロセス考古学はおろか、プロセス考古学以前の状況に留まっていると言わざるを得ず、英米の動向と比較すれば楽観的にさえ見える。その中で、岡村秀典は、「区系類型論とマルクス主義考古学」と題した論文^(注13)で、理論考古学的な整理に成功している。そこでは、蘇秉琦の区系類型論が今世紀初頭の欧州の文化史的考古学のナショナリズムに接近すると捉えられ、マルクス主義考古学の功罪

については、中国の現代史の中で位置づけられている。史的唯物論の枠組みが実証的な研究に寄与したものは大きいですが、考古学研究者の自省的な研究姿勢が世界的に迫られているのも事実であって、中国考古学でも遅かれ早かれその余波が来るだろう。その意味で、「世界の考古学思潮の中に位置づけながら、外国考古学としての新しい中国考古学の地平を切り開く営み」が必要だろうが、ロシアのように、新たに民族・国家主義考古学が勃興してくるのではないかという懸念も私は捨てきれない。文化史的考古学からの脱皮がいかに果たされるかについて、中国を注意深く見守っていく必要があるようだ。

5. まとめ

現在の考古学に進行中の変化を一言で言い当てるなら、無垢を喪失した考古学は、「第2の誕生」、すなわち反抗期に入ったと言えるだろう。その喧嘩相手は文化史的考古学であり、プロセス考古学であり、時には国家や植民地のイデオロギーであったりする。また、全体として成熟しておらず、理論問題を扱う際に特有の観念の遊戯に陥った例も散見される。だが、大多数の考古学研究者は、その視点の相違に関わらず、日々、蓄積される情報に翻弄されており、実のところ、理論考古学のような子供の喧嘩に構ってられないというのが現状である。「どうか邪魔しないでくれ。私は目下発掘中なのだ」。穴沢味光の引いたG. ダニエルの言葉である^(註14)。そもそも、ポスト・プロセス考古学では理論と事実という二分法は無意味な筈であって、「理論考古学」という名称自体が論理矛盾である。過去に現代の投影を読みとる自省的な研究姿勢は尊重されるべきだけれども、理論考古学自身がそうである点も見落としてはならない。だとすれば、考古学研究者にとって一体何が真実なのか、果てしない論理の迷路をさまようだけなのか。

この閉塞状況を脱する手だてとして、理論考古学的世界的な統合が、当面の課題となるだろう。それには、組織と研究者個人の両面から実施されねばならない。まず、組織的活動では、サザンプトンの学会においてC. エバンスがG. クラークおよびV. G. チャイルドを再評価して、国家的ではなく、国際的な視野に立つ考古学の必要性を説いているし、将来的には、例えば世界考古学会議やユネスコの「世界遺産」などが個別の研究戦略とも密接に関わり合うようになると思われる。そうなると、世界的な情報交換の基盤整備が不可欠である。近年ではインターネットによる経済効果がマスコミの話題をさらっているが、考古学の分野でもその実務的な利用が一層活発化するだろう。特に、本稿との関連で言えば、サザンプトン大学考古学研究室(<http://avebury.arch.soton.ac.uk/NetStuff/archplaces.html>)、世界考古学会議(<http://wac.soton.ac.uk/wac/>)、コネチカット大学(アーキ・ネット)(<http://spirit.lib.uconn.edu/archaeology.html>)、ダーラム大学考古学研究室(<http://www.dur.ac.uk/Archaeology/>)などが充実したホーム・ページを持っていて、他の考古学サイトへのリンクも豊富である。また、遺跡レベルでも、シカゴ大学東方研究所(<http://www-oi.uchicago.edu/OI/default.html>)やアナトリアの初期新石器遺跡であるチャタル・ホユック([http://catal.arch.cam.ac.uk/catal.html](http://catal.arch.cam.ac.uk/catal/catal.html))などから情報発信がなされている。ただし、

現状では考古学関連のホーム・ページが多いとは言えず、有用な情報に到達するには若干のほどかしさを感じるけれども、今後の利用が増加するにつれて解消するに違いない。次に、研究者個人の活動として、理論考古学が提起した自らの視点を批判的に捉えるために、考古学説史の比較研究の要請が高まるだろう。考古学説史の編纂は、既にB.G.トリッガーやG.ダニエルなどの労作があるが、今後の課題としては第三世界と中国をいかに位置付けるかが鍵である。異なった歴史性に根付く学説史の比較は確かに容易ではない。しかし、これを避けては今までのポスト・プロセス考古学の歩みが死んでしまうし、理論考古学は分裂してしまうだろう。

これらの実践には、多くの試行錯誤が付き物である。だが、伝統的な言い方であるが、最終的には理論の動向がどうであれ、考古学は歴史を叙述する努力を失ってはならないと私は考える。無論、それは理論考古学を了解した上での歴史叙述であって、文化史的考古学へ帰るのではない。その試みの一つとして、私は別稿で「文化構造論」^(注15)を唱えている。これは、総体として認識することを前提とした文化の関係性を構造論的に捉え、それを異文化との比較によって自文化を再構成するものだ。これが唯一の方法ではないが、極端な相対主義や還元主義に走らなくても、経験主義的な方法を揚棄する道は、案外近くにあるに違いない。それを、やや逆説めいた言い方であるが、理論考古学の現状は語っているように思われる。

本稿は、私見を交えて、理論考古学をやや批判的に論評した。内容について、誤読・誤解があれば、すべて筆者の責任である。最後に、蛇足ながら、理論考古学の将来に対して決して悲観していない。むしろ期待している。だが、従来の考古学パラダイムに対する不満を訴えるだけでは懸念を表せざるを得ない。肝要なのは、その「節度」を見極めること、つまり理論考古学の統合への模索こそ、現代に生きる考古学研究者の急務の課題なのかもしれない。

(かわの・かずたか=当センター調査第2課調査第1係調査員)

注1 B.G.Trigger, *A History of Archaeological Thought*, 1989.

注2 K.R.Dark, *Theoretical Archaeology*, New York, 1995.

注3 R.J.Wenke, *Patterns in Prehistory, Humankind's First Three Million Years*, 1984.

注4 C.Hawkes, *Archaeological Theory and Methode*, *American Anthropologist* 56, 1954, pp.161~162.

注5 松本直子「書評 コリン・レンフリュー、エズラ・ズプロウ編「古代の心—認知考古学の諸要素—」『考古学研究』第42巻第1号、1995。

注6 C.Renfrew, E.B.W.Zubrow(eds.), *the Ancient Mind-Elements of cognitive archaeology*, 1994.

注7 P.J.Ucko(eds.), *Theory in Archaeology -A world perspective-*, London, 1995.

注8 安斎正人「考える考古学」『現代思想』第12号、1990。

注9 T.C.Patterson, *History and the Post-processual Archaeologies*, *Man* 24-4, 1989.

注10 穴沢味光「象徴考古学への懸念—M.シャンクスとC.テイリィ『考古学の再構築』をめぐって」『古代文化』第40巻第2号 1988。

注11 杜正勝(木下保明訳)「考古学と中国古代史研究」前・後『京都府埋蔵文化財情報』第55・56号、1995。

注12 兪偉超・張愛永(袁靖・加藤真二訳)「考古学新理解論網」『博古研究』第6号、1993。

注13 岡村秀典「区系類型論とマルクス主義考古学」『展望 考古学』考古学研究会40周年記念論集、1995。

注14 穴沢味光「書評 角田文衛著『転換期の考古学』」『古代文化』第46巻第4号 1994。

注15 拙稿「森の王」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 1996。

平成7年度発掘調査略報

13. 奈具谷遺跡

所在地 竹野郡弥栄町溝谷
 調査期間 平成7年5月17日～11月10日
 調査面積 約600m²

はじめに 奈具谷遺跡は、農林水産省近畿農政局の「丹後国営農地開発事業」の奈具団地造成工事に先立ち、同局の依頼を受けて行った。今回の調査地点は、一昨年調査が行われた場所の西側約100mに位置する尾根と尾根に囲まれた狭小な沖積地である。前回の調査では、板杭列を検出した。護岸施設の設けられた流路跡は取水口を持ち、またトチの実のさらし場などの遺構が確認された。これらの遺構に伴って、弥生時代中期後半の土器や槽などの木製品が多量に出土している。また、近畿地方では2例目となった丁字頭勾玉も出土している。

調査概要 今回の調査地は、尾根の張り出しなどの地形にあわせて設定した。遺構面は上下2面ある。上層は湿地が完全に埋没し、安定面が形成された時期である。下層は東半分が湿地状であった。上層では、流路跡2条(流路跡1・2)と、これに平行する立板列を8条確認した。

流路跡1 検出長約25m・幅約1.2m・深さ約0.2mを測り、北流する。流路は南から約17.5mのところそのまま北流するものと東流するものとに分かれる。この流路跡には3か所の護岸施設がみられる。いずれも流路の肩部分に平行して、厚さ15mmほどの横板を据えている。これを固定する角杭は、長さ約0.6～1mで、板より深い方に0.5mほど打ち込まれていた(杭は先端を鉄器でカットし、尖らせている)。出土遺物は、弥生時代中期後半(畿内第Ⅳ様式並行)の土器、石斧などの石器、石製品、建築部材の板材を主体とした木製品、水晶(原石)などが出土した。

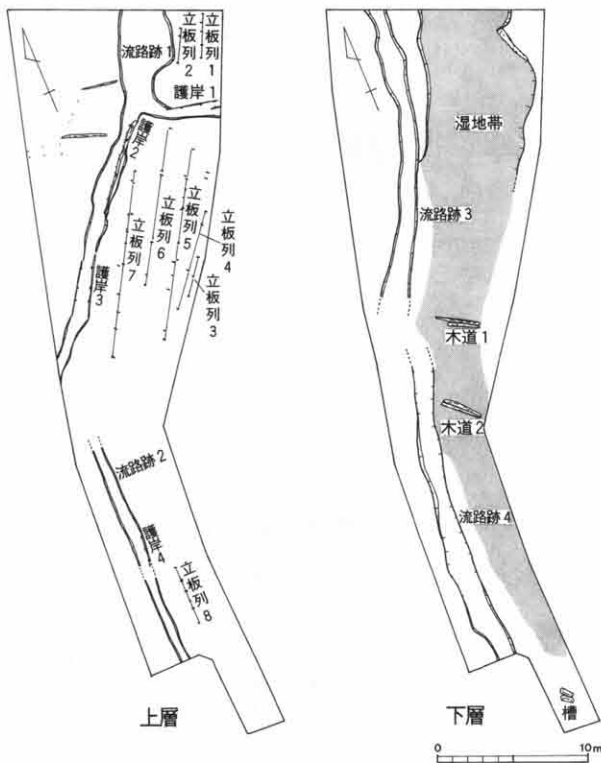
流路跡2 幅約0.8m・深さ約0.15mを測る。長さは約15mを確認したが、その後の土地利用のためか、流路の北側は途中で途切れる。この流路では1か所の護岸を確認したが、東側部分のみである。構造は流路跡1のものと同様である。

出土遺物には土器、木器、石庖丁などの石器がある。

なお、流路跡2は、上層遺構面よりやや下で



第1図 調査地位置図(1/25,000)



第2図 遺構変遷図

検出したため流路跡1より古い可能性はある。

立板列 流路跡1に平行したものの7条、流路跡2に平行したものの1条を確認した。立板列とは、長さ0.3~0.7m・幅約0.4m・厚さ約0.05mの長方形の板を縦方向に点々と埋め込み、列となしたものである。これらの板は流路に直交する形で設置されている。立板列は長いもので延長約12.8m、短いもので約2.4mを測る。用途については立板の埋め込まれた土壌の理化学的分析の結果、イネのプラントオパールを相当数確認したため、稲作を行っていたことも考えられ、立板列は、水田畦畔の可能性もある。

下層では、流路跡を2条確認した。これらは上層の流路跡と異なり、護岸施設

は見られない。北側に位置する流路跡3からは主に土器が出土した。南側の流路跡4からは土器・石庖丁などの石器や長さはさまざまであるが、建築部材と見られる板材やその他の木製品が出土した。また、流路跡の東側部分は湿地状を呈し、倒木も見られた。湿地の利用は消極的であったようで、湿地を歩行するために渡されたと思われる橋状の木道が流路跡に直交するように2か所で見られたのみである。これとは別に、調査区が一番南側で、人為的に縦半分に割られた木製の槽が、側面を中心に合わせ、底部を上にして置かれていた。その用途は不明である。下層では流路の埋土からイネのプラントオパールが検出されているが、流れ込みの可能性があり、稲作の積極的な評価はむずかしいと思われる。

まとめ 今回の調査で、弥生時代中期後半の2時期の谷部の利用状況が把握できた。

1)上層は、流路跡の人為的改良(護岸施設)によって、湿地の有効利用が可能になった(プラントオパール分析では稲作の可能性あり)。前回の奈具谷遺跡(当調査地から東へ約100m)でも同様の水利・灌漑施設が見つかっており、同時期のものとして関連があると思われる。

2)下層は、流路跡と、湿地に木道をつけるのみで、谷部の積極的な土地利用が見られなかった。

3)出土遺物には、土器・石器・木器がある。特に、土器・木製品は遺存状態も良好であり、隣接するという立地から奈具岡遺跡を補足する遺物といえる。

(柴 暁彦)

14. 枯木谷遺跡

所在地 中郡大宮町奥大野小字枯木谷
 調査期間 平成7年9月19日～11月29日
 調査面積 約1,000m²

はじめに 今回の発掘調査は、「丹後国営農地開発事業」の大野団地造成工事に先立ち、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。枯木谷遺跡は、丹後半島を南北に貫流する竹野川中流域に広がる、峰山盆地南端の西側丘陵のやや奥まった谷部に所在する。平成5年度に京都府教育委員会が試掘調査を行い、枯木谷遺跡北西部の小規模な谷部と丘陵裾斜面で、良好な遺物の出土が報告されている。今回の発掘調査は、団地造成範囲内において特に遺構・遺物が集中すると判断された、遺跡北西部の小規模な谷部を調査対象地とした。以下、概要について報告する。

調査概要 過去の試掘調査で遺物の集中が確認された地点を中心に、谷部と丘陵裾斜面の3か所に調査トレンチ(A～C地区)を設定した。

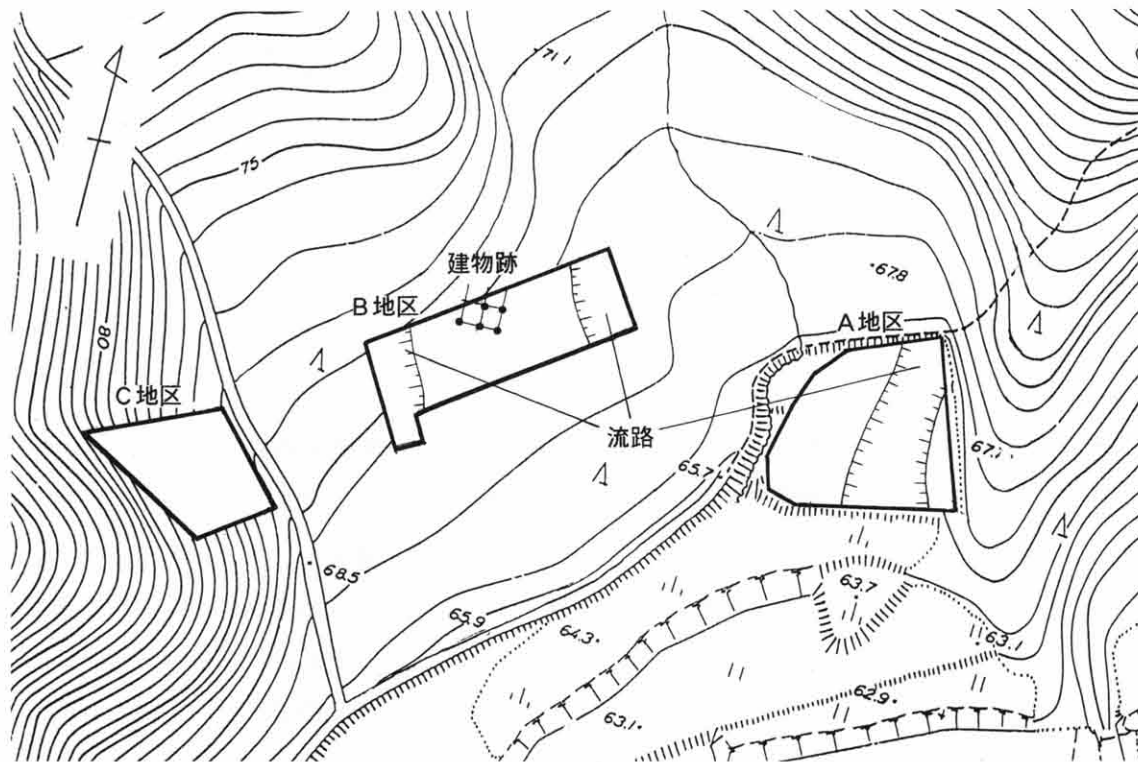
A地区 谷の東側丘陵裾の水田部に設けたトレンチである。調査地全域が旧河川跡であり、東端部に片寄って浅い河川跡を検出した。河川跡は幅約8m、検出面からの深さは約60cmを測る。河川内には風化花崗岩の粗砂と黒色粘質土が互層に堆積し、特に粗砂層を中心に奈良時代後半の年代観をもつ須恵器・土師器の出土をみた。出土遺物は、須恵器の蓋・杯などの供膳土器が高い比率を占めている。また、蓋・杯には、墨書・転用硯・漆容器の存在も認められる。

B地区 谷部中央のゆるやかな平坦地に設けたトレンチである。地表下約60cmで遺構面(地山面)を検出した。地山層は風化花崗岩の粗砂層であるが、上面は硬化しており、旧河川跡と掘立柱建物跡を検出した。

掘立柱建物跡は、その軸線を南北方向に取っている。建物跡は部分的な検出に終わったことから、全体規模は不明であるが、東西2間(約6.0m)×南北1間(約3.6m)を検出している。建物跡は、柱穴の位置関係から総柱とみられる。建



第1図 調査地位置図(1/25,000)



第2図 調査区配置図(1/1,000)

物跡に伴う遺物の出土がみられないが、柱穴掘形が方形を呈すること、A地区の河川跡出土遺物からみて、建物跡は奈良時代後半頃とみてよからう。

C地区 谷の西側丘陵斜面裾に設けたトレンチである。調査の結果、わずかに遺物を包含する暗茶褐色の風化花崗岩粗砂層を検出したが、遺構の検出は認められなかった。

まとめ 今回の調査によって、枯木谷遺跡は、奈良時代後半期の集落跡であることが明らかとなった。検出した建物跡は1棟であったが、周辺に平坦地が広がっていることから、他に数棟の建物跡が存在している可能性が高い。建物跡の方位が谷地形に規制されずに南北方向主軸を取ることで、出土土器が供膳土器を主体とすること、転用硯・墨書土器の出土などから、この遺跡は小規模ながらも公的な性格の強い集落跡と判断される。これまでに墨書土器は10数点が出土しているが、一部に「成」・「食」・「田□」が判読可能であった。

大宮町内においては、これまでに奈良時代を含む集落跡として正垣遺跡(南西約1.4km)が調査されている。正垣遺跡では、奈良～平安時代に属する20棟の掘立柱建物跡と柵列の検出、石帯・墨書土器の出土などから、官衙的性格の強い遺跡として周知されている。古くは丹後国倉垣庄に含まれることから、枯木谷遺跡・正垣遺跡は何らかの関連をもった遺跡である可能性が高いが、現段階では不明な点が多い。今後の周辺地域での奈良時代の集落跡の調査に期待が寄せられる。

(竹原一彦)

15. 桑原口遺跡

所在地 宮津市字喜多地内
 調査期間 平成7年6月23日～12月15日
 調査面積 約700m²

はじめに この調査は、京都縦貫自動車道の建設に伴い、京都府道路公社の依頼を受けて実施した。調査地(第1図)の背後に松ヶ鼻とよばれる東から西へ続く丘陵性山地がある。この丘陵性山地の突端付近は桑原口と呼ばれ、1953年の耕地整理の時に多数の土器片が出土している。1971年には国鉄宮守線(現北近畿タンゴ鉄道)の建設に伴い、京都府教育委員会が調査を実施している。弥生時代末から古墳時代初頭にかけての住居跡が見つまっている。今回の調査では、遺跡の範囲や集落跡の広がりなどを主目的に調査を実施した。調査の便宜上、北近畿タンゴ鉄道を挟んで西側をA地区、東側をB地区と呼称する。

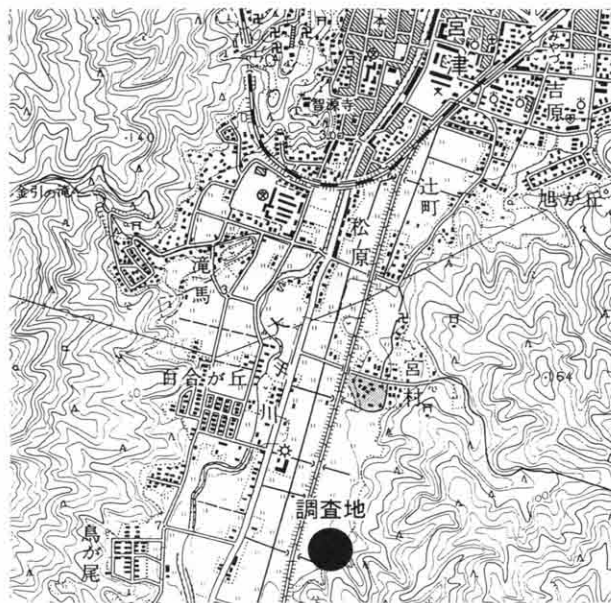
調査概要 今年度は、A・B両地区の試掘調査とB地区の本調査を実施した。調査地の地表下1～1.2mに弥生時代末から古墳時代前期の遺物が多量に出土する包含層がある。この包含層下の灰色シルト層が遺構面にあたる。弥生時代末から古墳時代初め頃の住居跡4棟、掘立柱建物跡1棟、古墳時代後期初め頃の流路跡などを確認した(第2図)。以下、遺構ごとに調査概要を報告する。

SH07 トレンチ南端で検出した。周壁溝のみを確認した。幅20～40cm・深さ20cm前後・検出長約7.2mを測る。全容は不明であるが、直径約9mの円形住居跡になる。

SH04 トレンチ中央部で検出した。平面形は方形である。周壁溝は一周し、北東隅で住居外にのびると思われる。北側床面で焼け焦げた木材がかたまっていた。出土した。

SH06 トレンチ南東端で検出した。地山が垂直気味に立ち上がることや周壁溝が存在していることなどから住居跡と判断した。直径約10mのいびつな円形住居跡になると考えられる。

SB26 SH23に重複するように位置している。灰色シルト面に直径40～60cm・深さ80cm前後の掘形を設け、そこ



第1図 調査地位置図(1/25,000)

に幅20cm前後・残存長1m前後の杉材を柱にする。トレンチ外にのびている可能性があり、全容は不明であるが、今のところ1間×3間の規模が確認される。

SD15 トレンチ北西端で検出した。流路南端には、護岸に用いた杭や横板が検出された。検出長約11m・幅約2m前後の浅い流路跡である。出土土器から6世紀前半頃と考えられる。

SX02 トレンチ南西端で検出した。検出長約8mを測り、上面に流木に混じって弥生時代末から古墳時代中期頃の土器が出土している。

まとめ 調査地は、丘陵突端部に広がる台地に位置する。A地区の試掘では氾濫原に伴う川砂が厚く堆積し、包含層の分布も希薄になってくる。このことから、桑原口遺跡は北近畿タンゴ鉄道より東側に中心が存在する。また、規模や遺構密度の点や試掘結果と合わせてもB地区に集落が広がると考えられる。
(尾崎昌之)



第2図 B地区遺構平面図

16. 嶋 遺 跡

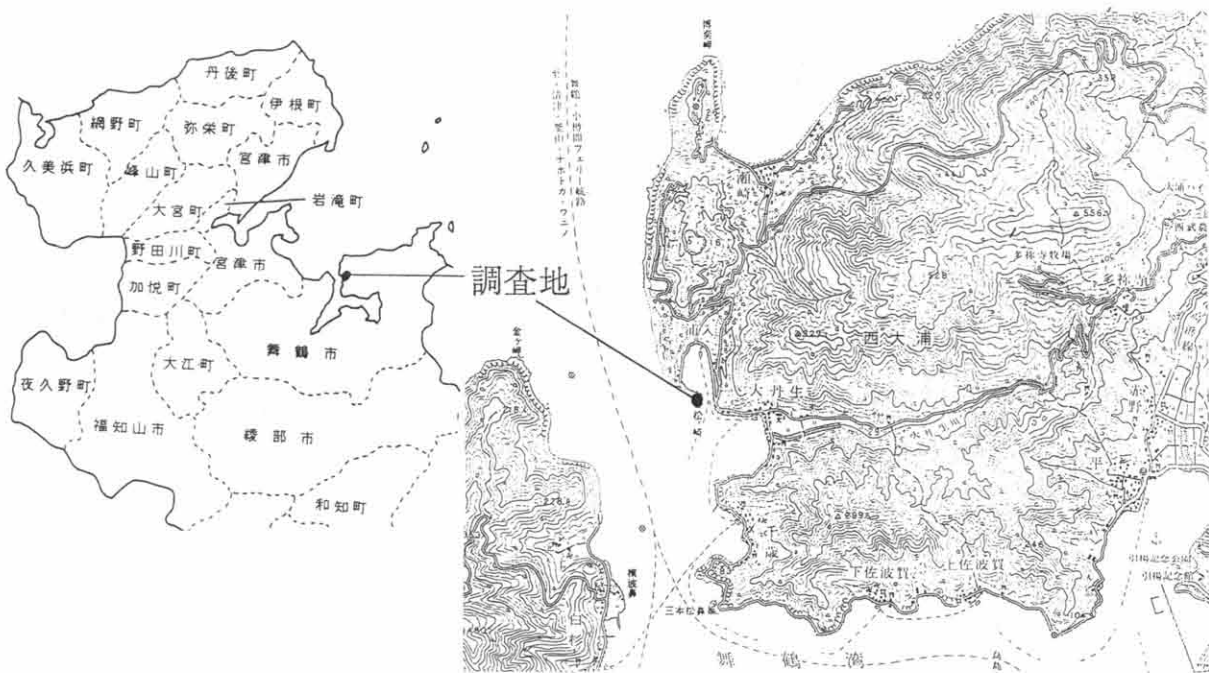
所在地 舞鶴市浦入
 調査期間 平成7年6月19日～12月22日
 調査面積 約3,200m²

はじめに 嶋遺跡は、舞鶴市浦入にあり、舞鶴湾口の東岸に形成された松ヶ崎と呼ばれる砂嘴上に立地している。浦入地区には、古墳時代や奈良時代から平安時代にかけての製塩遺跡、各時代の集落遺跡など、大規模な遺跡群の存在が予想されていて、嶋遺跡はこの一部をなしている。

舞鶴市教育委員会は、関西電力株式会社が浦入地区に火力発電所建設を計画したのに伴い、遺跡群全体にわたる調査を開始した。当調査研究センターでは、舞鶴市教育委員会から嶋遺跡(浦入遺跡群M地区)について調査依頼を受け調査を実施した。

一昨年、舞鶴市教育委員会は、嶋遺跡の内容を把握するために試掘調査を行い、縄文時代後期から平安時代にかけての遺物を検出した。遺物は、細片ばかりであったが、これによって縄文時代から平安時代にわたって断続的に営まれた集落遺跡である可能性が高まった。今回の発掘調査は、試掘調査の成果をふまえ、遺跡の全容を解明するとともに、保存のための資料を作成する目的で実施した。

調査概要 舞鶴市教育委員会の試掘成果にもとづいて、トレンチを設定して掘削を開始した。表土を重機で除去した後、人力によって掘削、清掃した後、精査して、遺構の検出をした。



調査地位置図

試掘調査では、地表下30cm前後までのところに柱穴をはじめとする遺構の存在が予想されていたので、全面にわたって水平掘削し、遺構の検出につとめた。

調査の結果、一部で、柱穴、土坑などの遺構とみられる掘形を検出した。遺構の分布は希薄であったが、包含層から縄文時代後期・晩期、弥生時代前期・中期・後期、古墳時代、奈良時代の土器を検出した。

一定の面まで調査が完了した時点で、トレンチの北側に向かって傾斜する面があることがわかった。そこで、この傾斜面が何であるかを調べるために、重機を再度投入して掘削した。

その結果、傾斜面の先端が、現在の海面より、1 m以上低く、なお、遺物が包含されていることがわかった。精査したところ、傾斜面の先端付近は汀であり、汀には弥生時代中期中頃の土器がいくつか良好な状態で分布していることから、弥生時代中期以前に属するものであることがわかった。汀線は、ベースの砂礫層と同じ暗茶褐色～暗灰色の砂層で構成されているが、これ以降は、花崗岩起源の黄白色系砂層の急激な堆積により埋没し、現在に至る。旧汀線を境に堆積環境の急激な変化があったことが明らかになった。黄白色系砂層の中には弥生時代後期を上限として古墳時代後期の須恵器などが含まれており、堆積環境の変化は弥生時代後期に前後する時期に活発化したことが遺物の上から推測できる。

また、砂嘴の下層には、安定した有機質土層が2層みられ、縄文時代後期の土器を包含している層があった。

この砂嘴は、縄文時代前期海進に伴って形成・発達したと考えられているが、縄文時代後期頃には人々がこの地を訪れて生活の場とし、これ以降、弥生時代中期後半頃までは生活の適地となっていたようである。そして、弥生時代の終わりごろから次第に水位が上昇し、現在の景観が形作られたと思われる。

まとめ 嶋遺跡の性格はこれまで明確ではなかったが、今回の調査で、縄文時代から奈良時代にかけて断続的に営まれた集落遺跡であることがわかった。

弥生時代中期以前の汀線を現海面下1 m以下で確認したことは、「弥生時代は気候の寒冷・湿潤化の中で、海水準の低下傾向で始まり、その末期には逆に、気候の温暖・乾燥化、海水準の上昇に急激に転じるという環境の転換点を迎えた時代であった^(注)」とする自然科学的研究成果に合致するものであり、この時期の海退現象を具体的に確認することができたという点で意義深い。

嶋遺跡の立地する砂嘴の成り立ちや、変遷を明らかにしていく上で重要な資料を得たといえる。今後のこの地域では、数多くの遺跡の調査が予定されているが、調査の進展によって周辺の遺跡とこの遺跡との関係が明らかにされることが望まれる。

(田代 弘)

注 遠藤邦彦・小杉正人「地形環境」(『弥生文化の研究』1 弥生人とその環境 雄山閣) 1989 1.20
～1.22 145頁

17. 池下城支城跡・堀古墳

所在地 舞鶴市池下・堀
 調査期間 平成7年9月26日～12月8日
 調査面積 池下城支城跡：約400m²、堀古墳：約200m²

はじめに 本調査は、近畿自動車道敦賀線の建設工事に先だって実施した。遺跡は、現在の池内下・小迫・堀の集落を見下ろす丘陵尾根部に立地している(第1図)。池下城支城跡は標高120m、堀古墳は標高100mのところにあつて、ともに北西から北東にかけての見晴らしは良好である。舞鶴湾(海)からの道、若狭に至る谷筋、さらに綾部の上林や上杉に抜ける山道の接点であることから、この地は古くから交通の要衝あるいは軍事的な拠点に当たっていたのであろう。池下城支城跡は中世山城として知られ、標高200mで背後にそびえる池下城(本城)の北に派生する尾根上に築かれている。最頂部の郭や、尾根をカットして掘られた堀切など、山城に特有の遺構がある。堀古墳は、池下城支城跡から小さな谷を3つへだてた丘陵尾根の先端部にある。両遺跡とも、丘陵先端部に人頭大くらいの石が多く露出していることから、古墓あるいは経塚の存在が予想された。

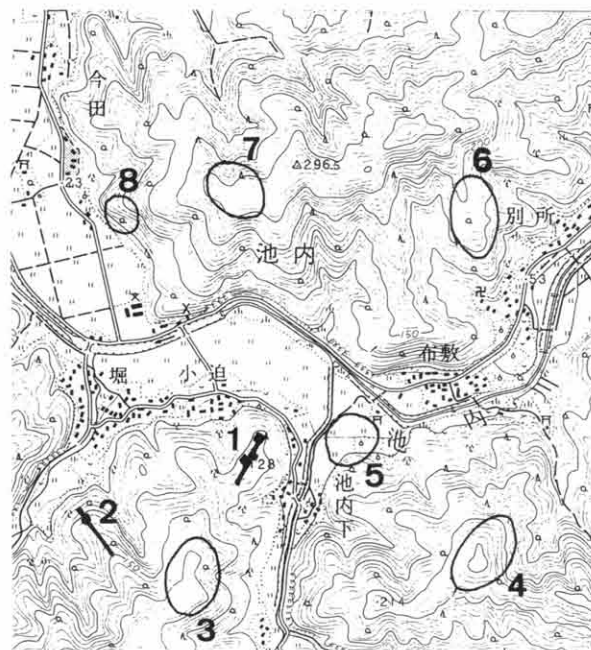
調査概要 調査の結果、池下城支城跡では山城遺構と集石遺構(経塚)1基、堀古墳では古墓1基をそれぞれ検出した。

A. 池下城支城跡

最頂部の郭はおよそ100m²の広さで、堀切は郭の南北を画して掘られていた。出土遺物はない。また、集石遺構は、大きな石が直径約7m・高さ約50cmの規模で積み重なっていた(写真)。中心部には不定形な深さ約1mの穴が掘られていた。集石の間に12～13世紀の中国製青白磁の小皿1点と刀の断片1点が出土した。経塚または古墓の可能性はある。

B. 堀古墳

古墳の遺構・遺物は検出されなかった。古墓は、円形に周溝をめぐるし、全体の直径は約6mである。中心部に後から掘られたくぼみがあり、さらにその外側に一辺約



第1図 調査地周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | |
|-----------|-----------|---------|
| 1. 池下城支城跡 | 2. 堀古墳 | 3. 池下城跡 |
| 4. 布敷城跡 | 5. 布敷遺跡 | 6. 別所城跡 |
| 7. 今田下村城跡 | 8. 池内石垣遺跡 | |



写真 集石遺構全景(池下城支城跡)

1.7mの方形の掘形があった。掘形内の埋納物は掘り出されたとみられ、出土遺物はない。ただ、掘形の北西隅に焼けた炭化材が見つかった。火葬骨や経塚関係遺物を埋納する前に、火を使って何らかの祭祀を行った可能性がある。周溝の中に散在する石は、もともと掘形の中に詰められていたものであろう。周溝の存在などから古墓と考えられるが、経塚の可能性も否定できない。

まとめ 池下城支城跡では、郭・堀切の山城遺構及び集石遺構(経塚)の存在が明らかになった。その急峻な地形や眺望のよさとあいまって、池下城の出城としての役割は十分に果たせたであろう。歴史的にみた池下城支城跡と池下城の関係については、今後の課題である。集石遺構については経塚と考えている。出土した中国製の青白磁皿(12~13世紀)から経塚築造時期もこの年代に近いものであろう。経塚は、仏教の作善行為として教典を埋納したところで、平安時代に始まり、近世以降まで形や性格を変えながら造られてきた。本例を経塚とすると、11世紀後半以降に如法経が埋められ、経塚が盛行してくる時期のものとして解釈できる。

堀古墳では古墳の遺構はなく、円形に周溝をめぐるした古墓1基を検出した。中心部に埋納物を掘り出した穴があり、さらにその掘形周辺で火を用いた痕跡があった。出土遺物はない。

この地域における山城遺構・経塚・古墓の貴重な調査例となった。

(黒坪一樹)

18. 上中太田遺跡

所在地 北桑田郡京北町大字上中小字城

調査期間 平成7年10月19日～12月22日

調査面積 約1,500m²

はじめに 上中太田遺跡は、北桑田郡京北町を南北に縦断する弓削川右岸の平野部に位置している。周辺には、弥生時代中期から中世にかけての遺物や遺構が確認されている上中遺跡、また山裾の丘陵部には鳥谷古墳群や、弾正古墳群などの古墳群、さらに今回の調査地の南東20mには、中世の城館とされる上中城跡などがある。

この遺跡は、京都府農林水産部の依頼を受け、府営ほ場整備事業に伴う事前調査として調査を実施した。調査地点は、平成6年度の京北町教育委員会による試掘調査を受けて、遺構・遺物の存在が特に密と思われる地点を中心に、当調査研究センターで面的な調査を実施した。その結果、後述するように弥生時代後期末から奈良時代にかけての集落遺跡であることが明らかとなった。

なお、調査では道路を挟んで南側を第1トレンチ、北側を第2トレンチとした。また、この調査と併行して、遺跡の北西への広がりを確認すべく、京北町教育委員会が新たな試掘調査を行った。

調査概要 今回の調査では、第1トレンチで竪穴式住居跡3棟、掘立柱建物跡1棟のほか、溝状遺構、土坑、ピット群などを、また第2トレンチで竪穴式住居跡1棟、ピット群などを検出した。

第1トレンチで検出した竪穴式住居跡3棟のうち1棟は、農道直下にあたるため北側半分は未検出であるが、推定直径約8mを測る円形のもので、出土土器から弥生時代後期末のものと考えられる。第1トレンチの残りの2棟と第2トレンチで検出した1棟は、一辺4～5mの方形で、柱穴の状況から4本柱になるものと思われ、いずれも古墳時代後期のものである。

掘立柱建物跡は、東西3間×南北4間(柱間約1.8m)の南北棟で、奈良時代のもと考えられ、一部には柱根も残っていた。

また、第1トレンチの東寄りで、2条の溝(SD01・SD02)を検出した。これらの溝は、トレンチ南端で重なりあって西側に「L」字状に屈曲している。そのうちの一つ(SD02)は、北方への連なりは確認できなかったが、上面幅約50cm・深さ約10cmを測り、溝内から少量ながら古墳時代後期の土器が出土した。さらに、逆



調査地位置図(1/25,000)



第1トレンチ航空写真(左が北)

台形状に掘り込まれる上面幅約1m・深さ約60cmの溝(S D01)は検出全長約50mで、トレンチ内を南北に縦断するよう伸びる。溝内からは、奈良時代の土師器や須恵器が出土した。

また、第1・第2トレンチともに多くのピットを検出している。その多くは、時代の帰属も不明であるが、一部では小片ながら瓦器片が出土している。

まとめ 京北町教育委員会による試掘調査と、本年度当調査研究センターが実施した発掘調査の結果、この地域での集落遺跡の存在が明確となった。

この遺跡では、弥生時代後期末に円形住居を主体とした集落が形成され、その後、古墳時代後期には集落の広がりが想定できる。京北町では、現在130基余りの古墳が確認されているが、古墳時代の集落に関する手がかりは少ない。このような中で、今回の調査によって、特に古墳時代の集落跡を確認できたことの意義は大きいといえよう。奈良時代に入ると掘立柱建物が造られるが、今回検出した掘立柱建物跡は小規模で、出土遺物からも官衙的施設とは考えにくく、一般的な集落の中の一つの建物跡であろう。また、京北町教育委員会の試掘調査や、ほ場整備事業に伴う事前のボーリング調査の結果などから、今回の調査地のすぐ北側には河川状あるいは沼状の地形があったことも推定されており、検出した2条の溝は、この地域の集落をめぐる排水施設としての利用などを考えることもできる。さらに、検出した多くのピットの中には鎌倉時代から室町時代のものも含まれるのであろう。調査地に隣接して中世城館跡とされる上中城跡も所在している。また、今後の整理作業によって新たな建物跡を構成できる可能性もあり、この地の中世のようすを知る手がかりを得られるかもしれない。

(竹下士郎)

19. 千代川遺跡第20次

所在地 亀岡市千代川町湯井
 調査期間 平成7年11月6日～12月8日
 調査面積 約200m²

はじめに 今回の発掘調査は、一級河川千々川改修工事に伴い、京都府亀岡土木事務所の依頼を受けて実施した。調査対象地は、大堰川右岸の行者山裾部に広がる扇状地上に位置する。

千代川遺跡は、国道9号バイパス予定路線関係の詳細な分布調査や発掘調査で、範囲が明らかにされた千代川町西部一帯の平地部に広がる大複合遺跡である。遺跡北半の拝田、桑寺周辺は丹波国府推定地の一つとなる。遺跡の南半部の湯井地区周辺は、過去4回の発掘調査が行われ、鎌倉時代の素掘り溝群、古墳時代前期の集落跡、奈良時代の掘立柱建物跡などが検出され、今回の調査地の隣接地では縄文時代晩期の遺物や、弥生時代中期の方形周溝墓などが検出された。

調査概要 調査地は千々川の流路に沿って南北に広がるため、試掘坑を含めて5か所にトレンチ及びグリッドを設定した。南側に位置する第1トレンチでは、約100m²を掘削し、南北に縦横に走る素掘り溝群を検出した。溝内から瓦器片、土師器片が出土しており、湯井地区の過去の調査で確認された素掘り溝と同様、中世のものとみられる。また、トレンチ北半において、素掘り溝を切る石列を検出したが、これは畦畔を区画するため、近世以降、設けられたものであろう。第1トレンチに隣接して、試掘坑を設定し、層位を確認した際、表土約2mの最下層から幅約30cmの黒色粘質土層を検出したが、遺構及び遺物の包含は認められなかった。調査区北側に設定した試掘坑は、千々川の氾濫原にあたり、砂礫層の堆積が約2mと厚く、遺構は削平されていた。包含層の中から、弥生土器、古墳時代～奈良時代の須恵器、陶磁器片などが出土した。

まとめ 今回の調査では、素掘り溝を中心とした中世の遺構群を検出したに留まる。調査区一帯は、千々川の氾濫原にあたり、集落などの生活の営まれた痕跡は認められなかった。調査区は、過去の調査で弥生時代の遺構が検出された隣接する台地面と5～10mの比高差があり、集落の中心はこの台地面から南に広がる緩斜面を中心に広がるものとみられる。



(野々口陽子)

調査地位置図(1/25,000)

20. 中海道遺跡第34次(3NNANK-34)

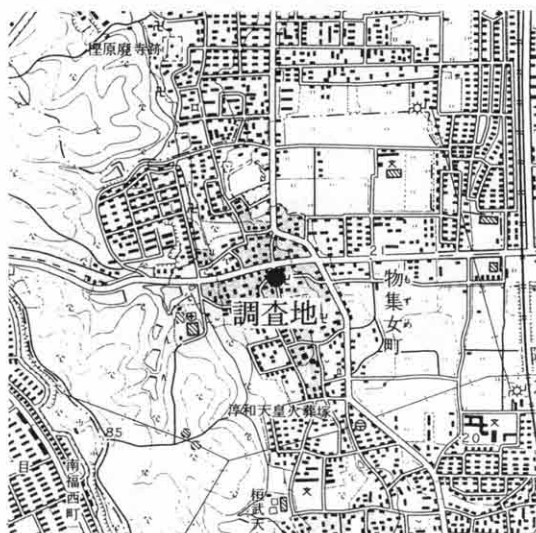
所在地 向日市物集女町御所海道地内
 調査期間 平成7年9月27日～11月21日
 調査面積 約290m²

はじめに 今回の調査は、久世北茶屋広域幹道アクセス街路整備工事に伴い、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。中海道遺跡は、向日市域の北端に位置し、東西約600m・南北約500mにわたって広がると考えられている。この遺跡では、過去33回にわたって発掘調査が実施されており、主に弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての良好な資料が得られている。当調査研究センターでも、今回の調査地点から東へ約100mの地点で第17次調査を実施しており、今回がそれに続く2度目の調査となる。

調査概要 調査地は、標高30m前後の緩斜面に位置している。東西に2か所のトレンチを設定し、西側を第1トレンチ、東側を第2トレンチとした。

第1トレンチでは、2面にわたって遺構が検出された。上層の遺構面からは中世の溝や土坑、ならびに近世の溝が検出され、下層の遺構面については、一旦、削平を受けたと考えられ、遺存状況は良好とは言えなかったが、弥生時代の土坑や溝が検出された。近世の遺物には土師皿や大型の甕、唐津系の小皿があり、中世の遺物には土師器や瓦器がある。弥生時代の遺物としては、後期と考えられる高杯や小型の甕が見られる。

第2トレンチでは、後世による削平や攪乱によって、検出された遺構ははなはだ少なかったが、標高が最も低い東端部で竪穴式住居跡1基を検出した。調査区内には、全体の1/5がかかる程度であったが、直径約8mの円形を呈するものと推測される。検出面から約0.2mの深さを残し、柱穴2か所と周壁溝を検出した。築造時期は、弥生時代後期と考えられる。



調査地位置図(1/25,000)

まとめ 今回の調査によって、弥生時代、中世、近世の遺構、ならびに遺物を検出した。弥生土器はその総量が極めて少ないが、その中に近江系の甕の存在が確認でき、また、竪穴式住居跡出土の壺も、外来系の可能性が考えられる。こうした他地域の土器の存在は、中海道遺跡の特徴であり、今回の成果はそれを補強するものである。 (奈良康正)

21. 長岡京跡右京第498次(7ANKNZ-8地区)

所在地 長岡京市天神1丁目
 調査期間 平成7年6月5日～8月11日、11月6日～12月22日
 調査面積 約610m²

はじめに 今回の調査は、都市計画道路石見下海印寺線街路整備工事に伴い、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。調査地は、推定右京六条三坊六・七・八町(旧五条三坊五・六町、六条三坊八町)にあたる。また、この間には推定六条条間小路(旧五条大路)及び六条条間北小路(旧五条条間南小路)が含まれる。周辺では、長岡京期の遺構・遺物のほかに、弥生時代後期から中世にかけての集落跡や、旧石器時代・縄文時代晩期の遺物などが確認されている。

調査概要 1トレンチでは、北東～南西にのびる溝を検出した。出土遺物から古墳時代前期頃のものと考えられる。なお、この溝の埋土からナイフ形石器(旧石器)が出土した。

2トレンチでは、南側で3間×3間以上の掘立柱建物跡を検出した。東側・北側に廂をもつものとみられる。柱間は、南北方向が約2.5m・東西方向が約1.8mを測る。長岡京期と考えられる。

3トレンチでは、長岡京期以降の削平のためかその時期の遺構はなく、平安時代後期の土坑、鎌倉時代中期の井戸、中世の掘立柱建物跡などを検出した。土坑は、直径約40cmの円形土坑である。土師皿などが出土した。井戸は、掘形の直径約3.4m・深さ約3mを測る。深さ約50cmで、ほぼ1.8m×2.2mの長形状になる。井戸枠などは残っていない。瓦器碗・土師皿・剣頭文軒丸瓦などが出土した。掘立柱建物跡は、南北方向に4個の柱穴が並ぶ。柱間は約2.4mである。調査地外にのびるものとみられ、全体規模は不明である。

まとめ 今回の調査では、調査範囲や後世の削平などの関係上、長岡京期の道路側溝などは確認できなかったが、2トレンチで建物跡を検出した。南側隣接地でも同時期と考えられる建物跡を検出しており(右京第474次調査)、同一宅地内にあったとも考えられる。

1トレンチで検出した溝は、付近で確認されている古墳時代の集落跡に関連するものともみられる。3トレンチで検出した遺構は、周辺で確認されている中世集落の一端を示すものであろう。また、今回出土したナイフ形石器は、乙訓地域の数少ない旧石器資料に重要な一例を追加したといえる。



(引原茂治)

調査地位置図(1/25,000)

22. 井 尻 遺 跡

所在地 宇治市伊勢田町井尻
 調査期間 平成7年10月26日～平成8年1月17日
 調査面積 約800m²

はじめに 井尻遺跡は、宇治川の流れる京都盆地の南部に位置し、宇治市の南西部、旧巨椋池の南岸に立地する。一帯は、近年の調査などによって、弥生時代から中世にわたる遺物が確認され、旧巨椋池の水資源を背景に古くから人々の居住が、くりかえされてきたことが明らかとなってきた。今回の調査は、府南部職員住宅の建設に先立って、京都府知事公室の依頼を受けて行った。

調査概要 調査は、住宅棟建設予定地2か所において実施した(第1・2トレンチ)。

その結果、両トレンチとも現在の地表面から約1.6m付近まで盛り土が行われており、その下方約50cmで江戸時代と想定される水田面を確認した。また、この遺構面の下方約90cmで杭跡群を検出したが、それ以外の顕著な遺構・遺物などは確認できなかった。この杭群の時期については、伴出した遺物が少なく明確ではないが、室町時代から江戸時代のものと思われる。その後、地表下最大約5mまで掘り下げを行ったが、粘土層の堆積が続くのみで、遺構などは存在しないことが判明した。

まとめ 今回の調査の結果、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。しかし、土層などの堆積



状況から判断して、この地点は巨椋池の縁辺部に当たっており、永らく低湿地を呈していた後、中世以降に耕作地として開発されたいことが判明した。旧巨椋池の湖岸の変化や縁辺部の状況を考える上で貴重な資料を得た。

(八木厚之)

調査地位置図(1/25,000)

網掛け部：旧巨椋池、『宇治市史』第1巻による。

23. 興戸宮ノ前遺跡

所在地 綴喜郡田辺町大字興戸小字宮ノ前・川原谷

調査期間 平成7年8月17日～12月18日

調査面積 約1,500m²

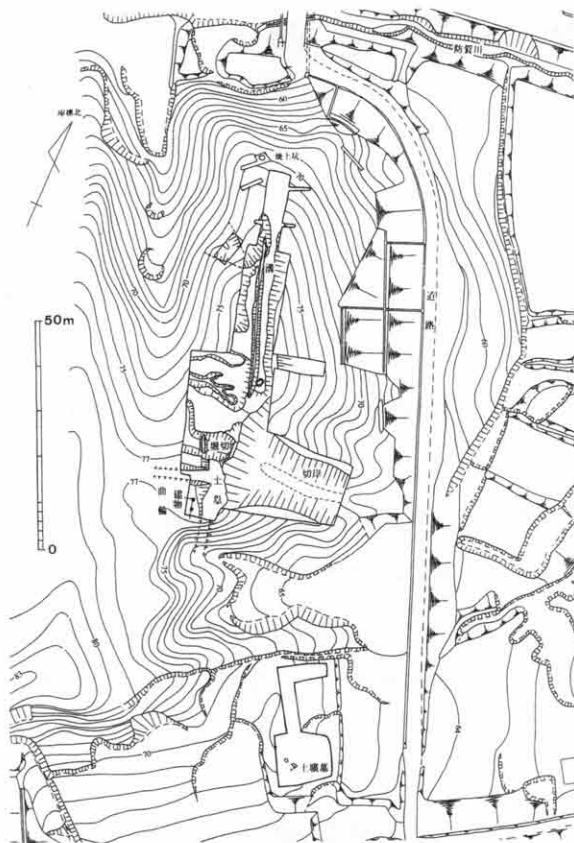
はじめに この調査は、府道八幡木津バイパス(通称山手幹線道路)の建設に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。平成7年度のこの事業による田辺町内の対象地は、同志社大学田辺キャンパスの北側境界から国道307号線との接合部に至る延長約1kmの範囲で、防賀川河谷を除くと、その多くが低丘陵地帯となっている。この対象地内には周知の遺跡として、南から興戸宮ノ前遺跡、興戸古墳群(10号墳)、田辺城跡の3遺跡が存在しており、道路敷設の工程の都合、興戸宮ノ前遺跡から調査に着手した。この遺跡は、防賀川水系によって形成された扇状地形の谷口付近に展開する遺跡で、その南半部分は丘陵縁辺に固定された天井川化した現防賀川を越えて一部丘陵地にかかっている。

今年度の調査対象地は、遺跡の南西にあたる標高60～77mを測る丘陵地であり、過去に古墳時代の須恵器が若干採取されていることから、窯跡あるいは古墳の存在が想定された。このため、まず総面積500m²の試掘トレンチを各所に設けて遺構・遺物の有無の確認を行った。その結果、城郭関連遺構をはじめ、集石土坑・溝などを検出したため、その拡がりを追求するため、調査区を拡張・連結して面的調査に切り変えた。

調査概要 対象地は、南西から北側に向かってのびる丘陵尾根の先端付近に相当し、南端の尾根裾の緩傾斜地と、その北側の尾根稜線を中心とした地区を面的に調査した。前者からは、竹藪の土入れのための人工的な盛り土下の地山面で、板状あるいは径3cm程度の小円礫を充填させた土坑を4基検出した。奈良時代の埋葬関連遺構とみられる。一方、後者の尾根稜線部では、調査前の地形観察によると、その南寄りに溝状の陥没地形を挟んで、円丘あるいは楕円丘状の地形が南北に並んでいた。特に、南側では、円墳状の隆起を示していたため、断ち割りを含めて面掘を実施したところ、人工的な盛り土によって断面台形状に構築された基底幅約8mの土堤状遺構であることが判明した。この土堤状遺構は、面的には調査区内で直角に曲折しており、やはり盛り土で造成された平坦地の北東コーナー部を遮蔽する役割にな



第1図 調査地位置図(1/25,000)



第2図 調査地平面図

平坦地上には、かつて盛り土による小規模な土堤が構築されていたことが、周囲に堆積する相当量の土量から推定できる。

さらに、この尾根の斜面部には、大小の溝(陥没地形)が、等高線に直交する方向に数条存在する。いくつかは、自然の開析によるとみられるが、先の堀状遺構の東延長にみられる大規模な谷状地形は、上縁線(墨線)が直線的であることや、横断面が逆台形を指向する点、斜面が急角度に整形されていることなどから、人工的な加工の痕跡とみることができる。

まとめ 今回の調査で検出した遺構のうち、丘陵部のそれは、中世の山城関連遺構とみるのが妥当である。この場合、確実にその性格を追求できる遺構は、尾根部の南寄りで見られた土堤状遺構と堀状遺構で、それぞれ、城郭遺構としての曲輪の縁辺を囲む土塁と堀底仕切りを備えた箱堀の形状をもつ堀切に比定できる。具体的な造営時期については、土塁や曲輪の造成盛り土中から出土したわずかな土器資料の年代観や、例えば堀切が障子堀の形態を採るなどの遺構の構造などから、およそ16世紀に求めることができる。一方、堀切以北の遺構に関しては、この山城の防衛上重要な位置を占める地区ではあるものの、遺構に伴う遺物は皆無で、城郭遺構としては他に類をみない構造を示すことから、城郭遺構とするにはなお検討を要する。いずれにせよ、今回検出した城郭遺構は、遺跡地図などには記載のない新規の山城として発見されたわけで、城郭遺構の調査例が少ない南山城地域にあって、貴重な資料を検出したと評価できる。

(伊賀高弘)

っている。また、この平坦地では、一辺0.7m前後の柱穴掘形(柱当りの直径0.3m)を検出しており、掘立柱建物跡の存在が確認された。

一方、この北側にみられた陥没地形は、後世の堆積土を除去すると、尾根筋と直交する方向に穿たれた断面逆台形状を呈する堀状遺構であることが判明した。この遺構の軸線は、先の土堤とほぼ一致しており、堀内に軸線と直交する小土堤(土橋)が2本造り出されている。

陥没地形(堀状遺構)の北側の尾根稜線部には、その軸線に沿って南北方向の「U」字形断面の素掘り溝(上縁幅約1.5m)が直線的にのび、その両側(東西側)には、幅2~3mの平坦地帯を残して、さらにその外側が急斜面となって丘陵裾に下るといふ人為的な造作痕を検出した。また、溝脇の平

24. 柿添遺跡第2次

所在地 相楽郡精華町北稻八間柿添
 調査期間 平成7年8月21日～11月29日
 調査面積 約820m²(試掘調査を含む)

はじめに 柿添遺跡は、山城盆地南西部に位置する精華町の北側沖積地に広がる遺跡である。遺跡の西側には京阪奈丘陵があり、近年関西学術研究都市建設関連の開発が著しい。盆地を望む丘陵頂部には古墳や中世の城跡があり、丘陵裾部から木津川西岸にかけて、条里地割りがよく残る。柿添遺跡の北東には古代寺院の里廃寺があるなど、周辺には各時代の遺跡が多く点在する。柿添遺跡は、すでに遺物散布地として知られていたが、昨年度当調査研究センターで実施した試掘調査で、古墳時代前期の溝などを検出したため、今回、調査域を拡張することになった(I区)。また、遺跡の分布域を知るために、道路計画用地内で東側に試掘トレンチ(A～E)を配置した。

今回の調査は、京都府土木建築部の依頼によって、枚方山城線の道路改良事業に先だって、昨年度に続いて、当調査研究センターが実施した。

調査概要 A～Eトレンチでは、Cトレンチを除いて遺物包含層と遺構を確認した。遺物包含層内の遺物は、磨耗が著しいものが多く、瓦器片のほか、常滑焼甕片、土師質羽釜片、奈良時代須恵器片、古墳時代土師器片などがコンテナ1箱分出土した。遺構は水田跡のほか、A・Bトレンチで、古墳時代と考えている東西方向の溝(SD01)を、幅約2.4m・深さ約1.0mの規模で確認した。この溝を計3か所で断ち割ったが、土師器片が少量出土したのみである。自然流路とも考えられるが、Dトレンチで検出した南北方向のSD02との関係も考えられ、人為的な溝と判断した。

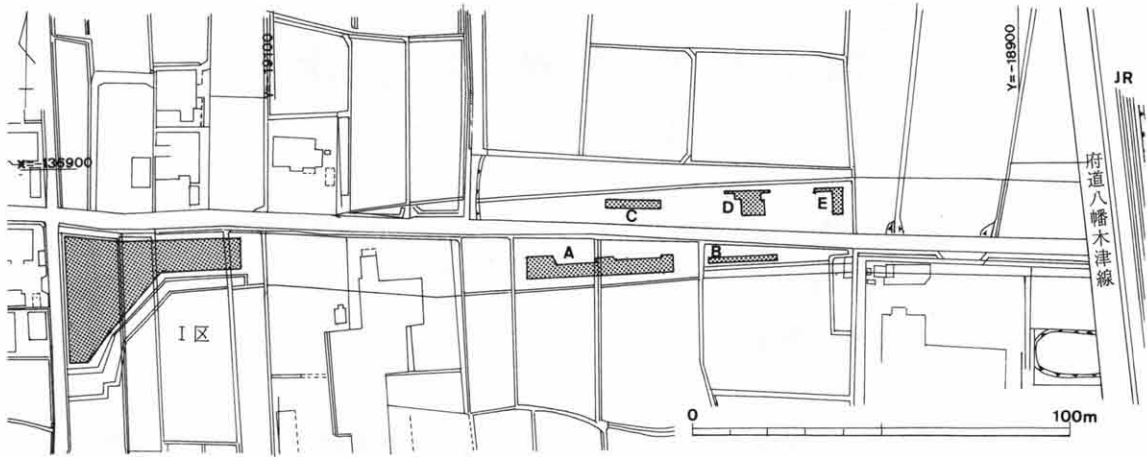
I区では、中世・古墳時代の2時期の遺構面を確認した。中世の遺構面では、水田関連の畦跡と野井戸状土坑、溝などを検出した。畦跡の方向は、現在残る条里地割りとよくあい、遅くとも中世には、条里地割りが行われていたと考える。出土遺物には、瓦器・皿・椀、青磁、羽釜片などがあり、時期は中世後半のものが多い。

古墳時代の遺構面では、土坑・溝・掘立柱建物跡・竪穴式住居跡などを検出した。

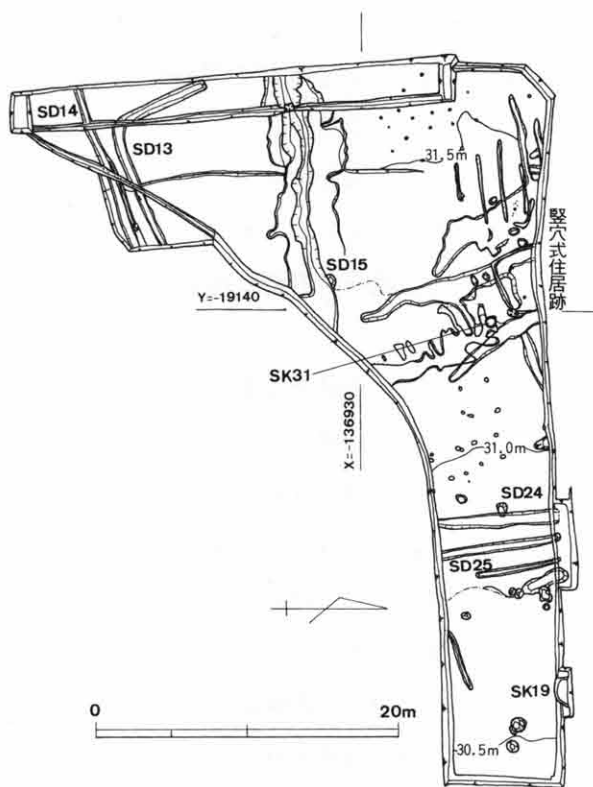
溝13・14と24・25は、いずれも深さ0.1～0.25m・幅約0.3mで、断面台形に近い。ともに平行に東西、南北に向き、集落内の区画溝の可能性がある。古墳時代前期の高杯、甕などが出土した。



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 トレンチ配置図



第3図 古墳時代遺構配置図

土坑SK19は、一辺2mの隅丸方形の土坑で、北側の部分は調査地外になる。内部には、炭を若干含んだ粘質土が堆積しており、古墳時代前期の壺・高杯・甕などが出土した。SK31は、長径0.8m・短径0.6mの楕円形の土坑で深さは約0.9mを測る。完形の甕・小型壺がまとまって出土している。井戸であった可能性があり、廃棄時に土器をまとめて投げ入れたと考えている。

調査地中央部の北端で検出した竪穴式住居跡は、約半分が調査地外に出る。一辺が4.5mの方形の住居跡で、後世の水田耕作によって削られ、深さ0.1m程度しか残っていない。遺物は、土師器片・須恵器杯身片が若干出土した。また、住居跡内及び南東側の溝上面で琥珀製の棗

玉が計4点出土した。このほか、掘立柱建物跡は小規模なものを3棟以上確認した。

まとめ 今回の調査成果について、簡単にまとめておきたい。

①古墳時代前期の集落の一部が確認できた。集落は北へ広がっていると考えている。また、集落内から、琥珀製棗玉が出土した例は稀で、その性格の検討が必要であろう。

②中世後期の水田跡は、現在の条里地割りに畦の方向がほぼ重なるので、遅くともこの時期には、現在に近い地割りになっていたと考えている。

今後、この地域の調査が進み、周辺の遺跡との関係が明らかにされることが望まれる。

(有井広幸)

府内遺跡紹介

69. 冷然院跡

冷然院は、平安時代はじめの9世紀前半に退位した天皇(太上天皇)が移り住んだ後院の一つである。これまでの遺跡紹介でも述べたように、太上天皇が後院を設けて、退位後に平安宮を出てそこへ移り住むようになるのは嵯峨太上天皇が初めてである。そのなかでも、冷然院は、最初期に出てくる後院である。

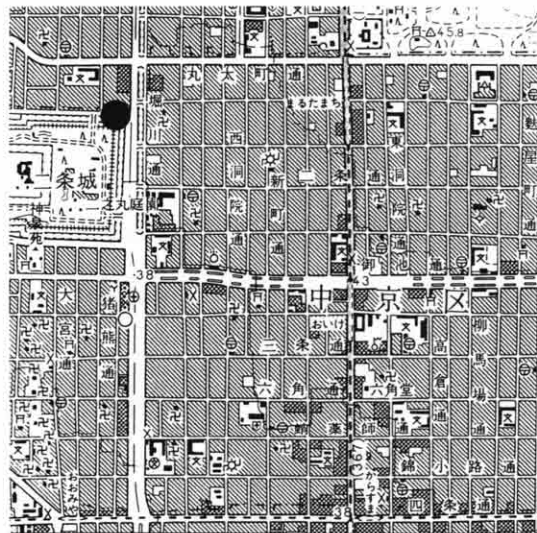
場所は、現在は二条城の中にはいっている。『拾芥抄』には、「大炊御門南堀川西、嵯峨天皇御宇、此院累代後院、弘仁帝本名冷然院云々」とあって、地名でいえば、二条城町内の、それも東北部に比定できる。

史料上の初見は、『類聚国史』巻31の弘仁7(816)年8月24日条で、そこには「丁巳。幸冷然院。命文人賦詩。賜侍臣録有差」とある。また、翌8(817)年4月にも同様のことが行われており、嵯峨天皇はたびたび冷然院へ行幸し、そこで漢詩などを読む会を開いていたことがわかる。このことからすれば、冷然院自体は、本来は後院ではなく、離宮として設けられたことがわかる。

造営時期については史料上には見えていない。しかし、先の『類聚国史』などの史料からすれば、弘仁年間には冷然院は一種の行幸先として使用されていたことからみて、造営されたのは、嵯峨の即位後間もない頃と見てよからう。

冷然院が「累代後院」とまで意識されるようになるのは、嵯峨の譲位後であろう。『日本紀略』弘仁14(823)年4月10日条には、「甲午。帝遷于冷然院。詔右大臣藤原朝臣冬嗣曰。(下略)」とあり、嵯峨は、ここで淳和への譲位を執行している。その後、嵯峨は、約11年間、皇太后となった橘嘉智子とともに夫妻でここに住んだ。実際、天長7(830)年には、淳和皇后の正子が冷然院に父母である嵯峨太上天皇夫妻を訪れ、新たにできあがった寝殿を奉賀している(『日本紀略』)。以後冷然院では別表のように、嵯峨夫妻の嵯峨院への移住までいろいろな行事が行われている。このような事実からみて、以後、冷然院を後院として認識させていくこととなったようである。

淳和天皇も仁明への譲位に際して、平安宮から淳和院へ移っており、嵯峨の平安宮退去の先例になっている。仁明の即位後、嵯峨は夫妻で嵯峨院へ移るが、嵯峨の死後、嘉智子太皇太后は再び



遺跡推定地(1/25,000)

付表 六国史などに見える冷然院一覧(主なものに限る)

年次	西暦	内容	出典
弘仁14.4.10	823	帝遷于冷然院。(讓位)	日本紀略
天長2.正.4	825	掖庭公主參觀冷然院。	日本紀略
天長7.正.5	830	皇后謁冷泉院爲賀正也	日本紀略
天長7.8.26	830	皇后詣冷然院。奉賀新造寢殿。	日本紀略
天長8.正.3	831	皇后謁冷泉院。	日本紀略
天長8.7.18	831	相撲人十人令參冷然院。	日本紀略
天長8.12.29	831	新誕皇子於冷泉院塲。	日本紀略
天長10.2.24	833	皇帝遷御西院。爲讓位也	日本紀略
天長10.2.29	833	拝謁先太上天皇。及太皇太后宮於冷然院。還御東宮。	続日本後紀
承和元.正.3	834	後太上天皇賀先太上天皇於冷然院。以入新年。	続日本後紀
承和元.正.4	834	天皇朝謁先太上天皇及太皇太后於冷然院。	続日本後紀
承和元.8.3	834	上爲先太上天皇及太皇太后。置酒於冷然院。	続日本後紀
承和5.10.13	838	喚集諸司官人能書者五位已下四十人於冷然院。奉寫金剛壽命陀羅尼經一千軸。	続日本後紀
承和5.11.29	838	先太上天皇先御冷然院。次御神泉苑。	続日本後紀
承和9.4.11	842	天皇遷御冷然院。以修理内裏也	続日本後紀
承和9.7.23	842	于時天皇權御冷然院。皇太子從之。	続日本後紀
承和9.9.27	842	冷然院大垣西北角。無故頽壞二許丈。	続日本後紀
承和9.12.5	842	天皇始御紫宸殿。嵯峨太皇太后遷御于冷然院。	続日本後紀
承和15.4.17	848	上幸冷然院賜扈從親王及侍從等祿。	続日本後紀
承和15.5.22	848	上幸冷泉院避暑。	続日本後紀
嘉祥2.3.21	849	行幸雙岳。廻幸冷然院觀魚	続日本後紀
仁寿2.正.3	852	帝朝中宮於冷然院。	文徳実録
仁寿3.2.30	853	帝幸冷然院。翫景物也	文徳実録
斎衡元.4.13	854	帝自梨下院移御冷然院。	文徳実録
斎衡元.6.24	854	請僧卅二口於冷然院。讀大般若經。限三日訖。	文徳実録
斎衡3.2.18	856	請僧百三人於大極殿及冷然院。分讀大般若經。	文徳実録
斎衡3.5.9	856	請僧二百五十人於大極殿及冷然院。賀茂。松尾神社。分讀大般若經。限三日訖。	文徳実録
天安元.5.14	857	請僧六十三人於冷然院。限五ヶ日。轉讀大般若經。	文徳実録
天安元.6.28	857	請名僧廿八人於冷然院。轉讀大般若經。限以四ヶ日。	文徳実録
天安元.7.24	857	請名僧六十人於冷然院。轉讀大般若經。限以三ヶ日。	文徳実録
天安元.8.21	857	請名僧六十人於冷然院。限以五ヶ日。轉讀大般若經。	文徳実録
天安元.10.3	857	請名僧六十人於冷然院。限以三ヶ日。轉讀大般若經。	文徳実録
天安元.10.29	857	冷然院南庭大祓。緣奉幣八幡大菩薩宮使進發也。	文徳実録
天安元.11.23	857	不御豊楽院。便於冷然院。命公卿開宴。	文徳実録
天安2.4.10	858	於冷泉院南路大祓。	文徳実録
天安2.5.22	858	大雨。……東堀川水入冷然院。庭中如池。	文徳実録
天安2.8.26	858	屈名僧五十人於冷然院。轉讀大般若經。限以五ヶ日。	文徳実録
天安2.9.4	858	式部省率百官於冷然院南路頭舉哀。	三代実録
貞觀元.4.18	859	去年八月廿九日与 今上同輿。遷自冷然院。	三代実録
貞觀17.正.28	875	夜。冷然院火。延燒舍五十四宇。	三代実録
元慶4.7.28	880	内藏寮冷然院設酒饌。饗參議已上。	三代実録

冷然院に移り住んでそ

こで亡くなっている。仁明も、嘉智子に対して亡くなるまで正月の朝観行幸を行っており、この時点では冷然院は完全に後院として機能していたことがわかる。しかも、嵯峨が嵯峨院へ移った後も院司が置かれており、東国の荒廃田などが冷然院を維持するために寄進されたりしている。

嵯峨や嘉智子の死後も冷然院は後院として維持された。文徳朝にはたびたびここで大般若經の転読などが行われており、太上天皇や皇太后が住んでいなくても国家的な行事が催されている。

このように、9世紀前半に文化的に重要な行事をいろいろ行っていた冷然院ではあるが、貞觀17(875)年正月28日には火災に見舞われる。この時、「舎五十四宇」以外に、「秘閣収蔵凶籍文書」が灰燼に帰したと『三代実録』には記載されており、54もの建物が焼失する

という大火災であったことが知られる。この時の火災や、前年の淳和院の焼亡が正子太皇太后による嵯峨院の寺院化の原因になったことは、以前に紹介したとおりである。

ところで、この時の火災後の復旧は、史料が少なく詳しくはわからない。しかし、元慶年間に冷然院が使用されただけでなく、天皇を廃された後の陽成上皇は約60年間この冷然院で生活した。そして、『日本紀略』によれば、天曆3(949)年11月に再び火災に見舞われた。しかし、この時もすぐに再建に着手されたようで、この再建後、冷然院は冷泉院と呼ばれるようになったとする説もある。ただ、付表にあるように『日本紀略』などの史料にはもう少しはやくから冷泉院とみえており、表記は両方が併存してあった可能性もある。

また、この再建の約10年後の天徳4(960)年9月には内裏が炎上したが、この際には、村上天皇が冷泉院に移って翌年の11月までの約1年間、ここが仮内裏ともいうべき場所となっている。その後、冷泉上皇の後院としても用いられている。しかし、『日本紀略』によれば、天禄7(970)年4月にまた火災が発生し、ようやく38年後の寛弘5(1008)年に復興した。冷泉上皇の死後、しばらく荒れていたが、『扶桑略記』には、約50年後の永承6(1051)に後冷泉天皇が修復して里内裏としたことが見えている。後冷泉天皇は、その後、高陽院へ移ったりまた冷泉院へ戻ったりしたが、ついに天喜3(1055)年になり、冷泉院が破棄されることになり、替わって一条院が造営されて、以後は史上から姿を消すことになった。

冷然院は、推定地が二条城の中になるため、発掘調査をはじめ、まだほとんど調査がなされていないのが現状である。文献史料による推定はあるものの、建物の配置はおろか、敷地の規模なども全くわかっていない。特に、この地は、織田信長による旧二条城の造営に始まり、徳川家康による現二条城の造営など、近世に地形がかなり変わっていることが推定される。このような理由によって、平安時代初期の三代後院の内、累代の後院として最も隆盛を誇った冷然院の実態がほとんどわかっていないのは残念である。今後の各方面からの研究に期待される。

(土橋 誠)

<参考文献>

『京都の歴史』第1巻 京都市 1970

橋本義彦「後院について」(『平安貴族社会の研究』吉川弘文館) 1976

瀧浪貞子「葉子の変と上皇別宮の出現—後院の系譜(その1)—」、「奈良時代の上皇と「後院」—後院の系譜(その2)—」(同『日本古代宮廷社会の研究』所収 思文閣) 1991

長岡京跡調査だより・56

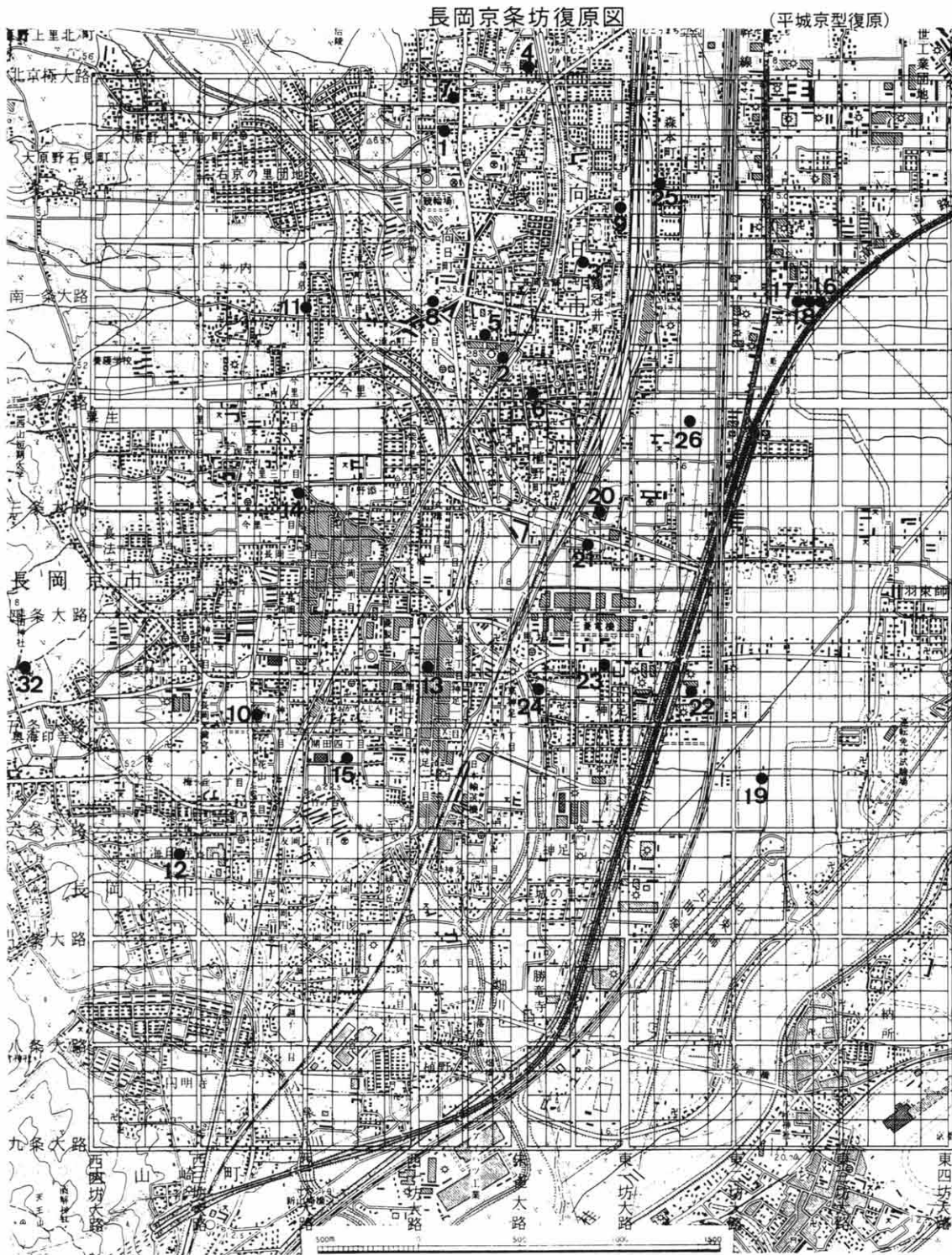
前回の「たより」以降の長岡京連絡協議会は、平成7年11月22日、12月20日、平成8年1月24日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は、宮内9件、右京域6件、左京域11件であった。京外の8件を併せると34件となる(調査地一覧表と位置図を参照)。この内、主要な報告について調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1996年1月末現在)

番号	調査回数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第313次	7ANBMC-4	向日市寺戸町南垣内5	(財)向日市埋文	10/3~1/25
2	宮内第314次	7ANFMK-8	向日市上植野町南開19-6	(財)向日市埋文	10/23~11/6
3	宮内第315次	7ANEOK-2	向日市鶏冠井町御屋敷19	(財)向日市埋文	10/23~11/10
4	宮内第316次	7ANBKD	向日市寺戸町小佃	(財)向日市埋文	10/30~6/21
5	宮内第317次	7ANFOC-4	向日市上植野町御塔道34-1、鶏冠井町山畑42	(財)向日市埋文	12/4~1/24
6	宮内第318次	7ANFMK-9	向日市上植野町南開8-2	(財)向日市埋文	12/11~12/13
7	宮内第319次	7ANBNC-2	向日市寺戸町中垣内1	(財)向日市埋文	12/4~1/31
8	宮内第320次	7ANCMM-2	向日市向日町南山31	(財)向日市埋文	12/6~12/22
9	宮内第321次	7ANDMD-2	向日市森本町前田4-1・5-1	(財)向日市埋文	12/11~2/28
10	右京第498次	7ANKNZ-8	長岡京市天神一丁目	(財)京都府埋文	6/5~8/11 11/6~12/22
11	右京第511次	7ANGKN	長岡京市井ノ内地内	(財)京都府埋文	10/20~
12	右京第512次	7ANOTJ-3	長岡京市下海印寺東条39他	(財)長岡京市埋文	12/4~12/25
13	右京第513次	7ANKKC-3	長岡京市開田一丁目13・19-4	(財)長岡京市埋文	11/30~1/11
14	右京第514次	7ANIHN-2	長岡京市今里二丁目41-1	(財)長岡京市埋文	1/8~1/18
15	右京第515次	7ANKNT-4	長岡京市開田四丁目608-1	長岡京市教委	1/16~1/31
16	左京第361次	7ANVKN-6	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文	4/10~2/末
17	左京第362次	7ANVKN-7	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文	4/10~2/末
18	左京第363次	7ANVKN-8	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文	4/10~2/末
19	左京第364次	7ANYNO-2	京都市伏見区淀樋瓜町地内	(財)京都市埋文	4/1~11/30
20	左京第366次	7ANFIR-3, FDN-2, FKA, FHM-6	向日市上植野町池ノ尻・大門・釜桂・樋瓜	(財)京都府埋文	5/22~12/22
21	左京第374次	7ANFBD-4	向日市上植野町伴田11-2	(財)向日市埋文	11/15~12/22
22	左京第375次	7ANMCK-5	長岡京市神足上八ノ坪12	(財)長岡京市埋文	12/11~
23	左京第376次	7ANLMR	長岡京市馬場見場走り17・17-5	(財)長岡京市埋文	12/18~
24	左京第377次	7ANMKA	長岡京市神足北川原1-10他	(財)長岡京市埋文	12/15~12/22
25	左京第378次	7ANDSB-4	向日市森本町四ノ坪26	(財)向日市埋文	1/8~1/30
26	左京第379次	7ANFYC	向日市上植野町柳ヶ町、極楽寺地内	(財)向日市埋文	1/22~2/8
27	中海道遺跡第32次	3NNANK-32	向日市物集女町ヲサン田6他	(財)向日市埋文	7/18~11/1
28	中海道遺跡第34次	3NNANK-34	向日市物集女町御所海道地内	(財)京都府埋文	9/27~11/28
29	笹屋遺跡第2次	7ASBHR	向日市寺戸町飛龍5-4	(財)向日市埋文	10/26~11/16
30	物集女城跡第2次	9ZMANY-2	向日市物集女町中条	(財)向日市埋文	10/26~11/30
31	北ノ口遺跡第1次	4ZKAKC	向日市物集女町北ノ口61-2	(財)向日市埋文	12/8~1/31
32	海印寺跡第3次・走田古墳群第1次	7CKPME-3	長岡京市奥海印寺明神前31	長岡京市教委	10/2~1/13

33	遺跡確認第IK-22次	7YYMS' SE-2	大山崎町大山崎尻江8-2	大山崎町教委	10/26~11/17
34	遺跡確認第IK-23次	7YYMS' HK-3	大山崎町大山崎傍示木18	大山崎町教委	11/8~12/22



▽番号は一覧表・本文()内と対応

調査地位置図

左京第364次 (19)
水垂遺跡

(財)京都市埋蔵文化財研究所

調査地は、京都市清掃局の水垂埋立処分地の拡張工事に伴うもので、平成2年度4月より開始した調査を平成7年度11月に終了したところである。長岡京期の建物跡や道路などと、その下層から古墳時代の村の跡(水垂遺跡)が見つかった。

長岡京期の遺構としては、掘立柱建物跡が六条大路(新条坊表示)の北と南で検出された。北側の宅地は、1町の南西隅だけを利用しており、面積1,350m²(409坪)で1町の32分の3にあたるものである。周りに溝を掘って限った敷地に、大きな建物跡と小さな建物数棟の跡が見つまっている。また、敷地の南と北に井戸が、南東部にはごみ捨て穴が掘られていた。南側の宅地は、1町の北西隅だけを利用したもので、北側のものより狭く、東二坊大路に沿って建物が建てられている。敷地の東側の道路との境には、柵が作られていた。調査地の南部にあたる七条条間大路と東二坊大路の交差点には、北西から南東に横切る川が流れ、橋が架けられていた。この橋の下流で、墨書人面土器、土馬、ミニチュア竈・甑、人形などの遺物が出土した。

下層の水垂遺跡では、竪穴式住居跡71棟、掘立柱建物跡15棟からなる古墳時代の村跡が検出された。これらは、4世紀後半～6世紀後半にかけてのもので、数回にわたって建て替えられたものと考えられる。したがって、同時期に作られた建物は5～6棟であったようである。竪穴式住居跡の多くは方形で、中央に炉あるいは竈を、壁際には貯蔵穴をもっている。中には、ベッド状遺構を備えているものもある。建物跡や川の中から、甕、壺、鉢、高杯などの土器類のほか、木製の壺鐙なども見つまっている。また、調査区の南よりのところでは、水田や畑の跡が見つまっている。水田の一つの大きさは、約5～150m²で、形は方形または長方形である。水田面や畦の上には、人や牛のものと思われる多数の足跡が見られる。畑は、水田と村との間のやや高いところに作られており、畝と作物を植えたと思われる小さな穴が連なっていた。遺物としては、鋤・鍬、田下駄、鉄製の鎌、臼・竪杵などが見つまっている。さらに、村のすぐ南で、方形周溝墓と2つの壺を組み合わせた土器棺墓も検出されている。

海印寺跡第3次(32)
走田古墳群第1次

長岡京市教育委員会

調査地は、阪急長岡天神駅の西方約1.5kmに所在する寂照院の敷地内である。これまでの調査の結果、古墳時代後期の横穴式石室を持つ2基の古墳と江戸時代前期と考えられる土葬墓群などが確認された。

2基の古墳の内、走田8号墳は、玄室の一部がわずかに残るのみで、北東隅から完形の須恵器杯身が1点出土した。この須恵器から、石室の築造時期は6世紀末と考えられている。

もう一つの9号墳は、南に開口する両袖式の横穴式石室をもつ古墳で、墳丘は、径約15m・高さ約3mほどの円墳になるのではないかと考えられる。玄室は長さ約3.05m・幅1.8~1.85m・高さ約2.3m以上、羨道は長さ2.3m以上・幅約1.5mの規模があり、床面には、礫を敷き詰め、玄室のほぼ中央に組合式家形石棺を安置していた。石棺は、2枚の部材からなる底石と短側石1枚が完全な形で残されていたが、もう1枚の短側石と蓋石、長側石のほとんどは持ち去られていた。底石は、高さ約225cm・幅約120cm・厚さ約15cmほどあり、側石を立てるために周囲を段状に削っていた。棺の内法は、長さ約185cm・幅約85cmほどの規模になる。短側石は、底石のすぐ南に倒された状態で出土したもので、長辺約115cm・短辺約65cm・厚さ約8cmほどある。内面の両側には、長側石と結合させるための溝が掘り窪められていた。これらの石棺材は、いずれも流紋岩質凝灰岩で、兵庫県加古川流域で産出される竜山石と呼ばれるものである。副葬品としては、石棺の底石上で須恵器の杯身と杯蓋が6点ほど出土しているのみで、その年代は7世紀の初め頃と考えられる。これらは、盗掘時に二次的に置かれたものらしく、底石上やその周辺から、長岡京期の土師器がまとまって出土していることから、盗掘は長岡京期に行われたと思われる。これは、長岡京の造営に必要な石材を入手するために、古墳の破壊を行った可能性を示すものと判断される。

また、調査地の表土から、須恵質四注式と呼ばれる陶棺の破片2点が出土している。このことから、走田古墳群では石棺以外に陶棺を埋葬した古墳があったことが明らかになった。

なお、走田9号墳の横穴式石室は、現状で保存整備されることが決まった。

参考資料：『長岡京跡と水垂遺跡のようす—京都市水垂埋立処分地拡張工事に伴う調査成果—』（(財)京都市埋蔵文化財研究所、1995）

『海印寺跡第3次・走田古墳群第1次調査現地説明会資料』（長岡京市教育委員会、1995）

（古瀬誠三）

センターの動向(95.11～96.1)

1. できごと

11. 1～ 8 文化財保護研究者訪中団(全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック海外研修)浙江省及び北京など各地の遺跡・博物館訪問、伊野係長、竹井・石尾主査調査員・黒坪調査員参加
- 6 千代川遺跡(亀岡市)発掘調査開始
- 11～12 日本考古学協会大会(於：茨城県ひたちなか市)古瀬主査調査員、伊賀・竹下調査員出席
- 16 全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(於：東京)木村常務理事・事務局長、園山事務局次長、安田課長補佐出席
- 内里八丁遺跡(下層面)現地説明会
- 17 職員研修—「韓国・歴史と文化を訪ねて」(於：当センター)講師：田中彰調査員
- 20 椋ノ木遺跡(精華町)発掘調査開始
- 21 引地城跡(大江町)発掘調査開始
柿添遺跡関係者説明会
- 22 藤田价浩理事、内里八丁遺跡現地視察
- 桑原口遺跡関係者説明会
長岡京連絡協議会
弓田遺跡発掘調査終了(4.18～)
- 23～12.3 府立丹後郷土資料館にて速報展示「奈具岡遺跡'95」
- 28 池下城支城跡・堀古墳関係者説明会
中海道遺跡発掘調査終了(9.27～)
- 29 堀古墳発掘調査終了(10.19～)
- 柿添遺跡発掘調査終了(8.21～)
- 30 職員研修—「同和教育の現状と動向」(於：当センター)講師：京都府教育庁指導部同和教育室・西山隆史室長
12. 4 石ヶ原古墳群(丹後町)発掘調査開始
京都府職員研修所・同和問題研修会(於：京都市)園山事務局次長出席
- 7 中澤圭二理事、嶋遺跡(舞鶴市)現地視察
- 大山崎町歴史資料館・福島克彦学芸員、興戸宮ノ前遺跡(城跡)現地指導
- 田辺城跡(田辺町)発掘調査開始
- 8 平成7年度第2回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：滋賀県文化財保護協会)土橋主任調査員出席
- 池下城支城跡発掘調査終了(9.25～)
- 13 嶋遺跡関係者説明会
- 14 千代川遺跡発掘調査終了(11.6～)
- 15 職員研修—「縄文時代の始まり」(於：当センター)講師：中川和哉調査員
- 桑原口遺跡発掘調査終了(6.23～)
- 18 興戸宮ノ前遺跡関係者説明会、発掘調査終了(8.17～)
- 20 第45回役員会・理事会開催(於：ルビノ京都堀川)樋口隆康理事長、中澤圭二副理事長、木村英男常務理事、藤井 学、井上満郎、藤田价浩、梅野 宏各理事出席
- 21 上中太田遺跡(京北町)現地説明会
京都府職員研修所・同和問題研修会(於：京都市)安藤事務局次長出席
長岡京連絡協議会

- | | |
|--|--|
| <p>22 嶋遺跡発掘調査終了(6.19～)
上中太田遺跡発掘調査終了(10.19～)
長岡京跡左京第366次調査(向日市上植野町)発掘調査終了(4.24～)
長岡京跡右京第498次調査(長岡京市天神)発掘調査終了(6.5～)</p> <p>25 職員研修—「交通安全研修」(於：当センター)講師：京都府向日町警察署、岩田一郎交通総務総括係長</p> <p>1.10 文化庁坂井調査官奈良具岡遺跡現地視察</p> <p>11～25 奈良国立文化財研究所専門研修「寺院官衙遺跡調査課程」、森下 衛調査員参加</p> | <p>12 田辺城跡発掘調査終了(12.7～)</p> <p>19 木村常務理事・事務局長、長岡京跡左京第361、362、363次調査(京都市南区)現地視察</p> <p>23 都出比呂志理事、長岡京跡左京第361、362、363次調査(京都市南区)現地視察</p> <p>24 長岡京連絡協議会</p> <p>26 工楽善通奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長、長岡京跡左京第361、362、363次調査(京都市南区)現地視察</p> <p>31 職員研修—「中国海外研修報告」(於：当センター)講師：伊野係長、竹井・石尾主査調査員、黒坪調査員
(安藤信策)</p> |
|--|--|

受贈図書一覧(7.11~8.1)

青森県埋蔵文化財調査センター	青森県埋蔵文化財調査報告第160集 家ノ前遺跡Ⅱ・鷹架遺跡Ⅱ発掘調査報告書、同第168集 黒森下(1)遺跡発掘調査報告書、同第172集 野尻(2)遺跡発掘調査報告書、同第175集 湯舟(1)・(2)遺跡発掘調査報告書、同第176集 森田(4)・(5)遺跡発掘調査報告書、同第178集 畑内遺跡発掘調査報告書、同第181集 泉山遺跡発掘調査報告書、同第182集 青森県遺跡詳細分布調査報告書Ⅶ、同第183集 塔ノ沢山(2)遺跡発掘調査報告書、同第184集 中崎遺跡発掘調査報告書
多賀城市埋蔵文化財調査センター (財)福島県文化センター	多賀城市文化財調査報告書第37集 高崎遺跡、同第38集 山王遺跡・市川橋遺跡、同第39集 山王遺跡―第17次調査―出土の漆紙文書、同第40集 野田館跡 福島県文化財調査報告書第304集 母畑地区遺跡発掘調査報告35、同第305集 母畑地区遺跡発掘調査報告36、同第310集 原町火力発電所関連遺跡調査報告、同第313集 母畑地区遺跡発掘調査報告37、同第315集 原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅵ、同第316集 常磐自動車道遺跡調査報告4
(財)福島市振興公社文化財調査室	福島市埋蔵文化財報告書第44集 南諏訪原遺跡、同第66集 月崎A遺跡、同第67集 学壇遺跡群、同第68集 勝口前畑遺跡2、同第69集 大平・後関遺跡、同第70集 浜井場遺跡・山ノ下遺跡・大平遺跡、同第71集 外大貝遺跡、同第72集 隅ヶ城跡、同第73集 麦地石遺跡、同第74集 勝口前畑遺跡3、同第75集 山ノ下遺跡、同第76集 宮畑遺跡、同第77集 下ノ平D遺跡・弓手原A遺跡、同第78集 大森城跡・大鳥城跡2、同第79集 大鳥城跡3、同第80集 富山遺跡、同第81集 八郎内遺跡、同第82集 摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査概要Ⅳ
(財)鹿嶋市文化スポーツ振興事業団	鹿嶋町の文化財第62集 鹿嶋町内遺跡発掘調査報告Ⅹ、同第65集 鹿嶋町内遺跡発掘調査報告ⅩⅠ、同第74集 国神遺跡Ⅴ、同第75集 鹿嶋町内遺跡発掘調査報告ⅩⅢ、同第76集 鹿嶋神宮駅北部埋蔵文化財調査報告Ⅸ、同第77集 鹿嶋神宮駅北部埋蔵文化財調査報告Ⅹ、同第80集 鹿嶋町内遺跡発掘調査報告ⅩⅣ、同第84集 鹿嶋町内遺跡発掘調査報告ⅩⅤ、同第85集 惣大行事日記(文久3年)、同第88集 西谷A遺跡、同第89集 春内遺跡、同第91集 片岡遺跡発掘調査報告書Ⅰ
(財)東総文化財センター	亀田泥炭遺跡、シンポジウム よみがえる篠本城跡
(財)君津郡市文化財センター	(財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書第83集 大竹遺跡発掘調査報告書、同第91集 大竹遺跡発掘調査報告書Ⅲ、同第99集 上笠上谷遺跡発掘調査報告書、同第104集 戸崎城山遺跡Ⅲ M地点、同第105集 狐塚遺跡発掘調査報告書、同第106集 境遺跡第3次調査、君津郡市文化財センター年報No.12
(財)東京都教育文化財団 東京都埋蔵文化財センター 富山県埋蔵文化財センター	東京都埋蔵文化財センター 年報15
(財)岐阜県文化財保護センター	平成7年度特別企画展図録 米作りの始まり 岐阜県文化財保護センター調査報告書第11集 戸入村平遺跡
(財)愛知県埋蔵文化財センター	10年のあゆみ、朝日遺跡への招待
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター	(財)瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録 京・鎌倉出土の瀬戸焼
(財)大阪府文化財調査研究中心	大阪府立弥生文化博物館 平成8年冬季企画展 発掘速報 大阪'96
桜井市立埋蔵文化財センター	平成7年度 冬季企画展解説書『纏向のまつり』

岡山県古代吉備文化財センター	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告103 下長田上野古墳群・上野遺跡
(財)広島県埋蔵文化財調査センター	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第131集 中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅲ)、同第132集 中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅳ)、同第133集 寺側古墳、同第134集 松谷1・2号古墓発掘調査報告書、同第135集 郡山城下町遺跡、同第136集 耳木第1号たたら跡・持丸川西たたら跡、年報X 平成5年度、研究輯録V
(財)徳島県埋蔵文化財センター	徳島県立埋蔵文化財総合センター開館記念シンポジウム 弥生の精華
(財)香川県埋蔵文化財調査センター	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第十八冊 国分寺楠井遺跡、高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 六条・上所遺跡、同第6冊 上天神遺跡
(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター	松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ、松山市文化財調査報告書第48集 大峰ヶ台遺跡、同第51集 辻町遺跡
(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	北九州市埋蔵文化財調査報告書第143集 祇園町遺跡 第3地点、同第151集 永犬丸遺跡、同第152集 潤崎遺跡3、同第160集 上清水遺跡Ⅲ区、同第161集 カキ遺跡(弥生時代編)、同第162集 井上遺跡1区、同第163集 草原遺跡・井上遺跡2区、同第164集 徳力土地区画整理事業関係調査報告7、同第165集 香月遺跡、同第166集 貫川遺跡9、同第167集 北方遺跡、同第168集 祇園町遺跡2 第3地点、同第169集 潤崎遺跡4、同第170集 貫川遺跡10、同第171集 長野城跡、同第172集 宗玄寺跡、同第173集 向ヶ江遺跡、同第174集 室町遺跡第2地点、同第175集 穴生古屋敷遺跡、同第176集 北方遺跡、同第177集 鬼ヶ原遺跡、同第178集 中島遺跡、同第179集 七条荒生田遺跡、同第180集 長野・早田遺跡第4地点、埋蔵文化財調査室年報11 平成5年度、研究紀要 第9号
仙台市教育委員会	仙台市文化財報告書第204集 平成6年度 年報16
米沢市教育委員会	米沢市埋蔵文化財調査報告書第47集 遺跡詳細分布調査報告書第8集、同第48集 一ノ坂、同第49集 矢子山城跡第2集調査報告書、同第50集 我妻館、同第51集 直江石堤遺跡報告書
境川村教育委員会	境川村埋蔵文化財発掘調査報告書第12輯 金山遺跡Ⅲ
婦中町教育委員会	千坊山遺跡(1)
多治見市教育委員会・多治見市文化財保護センター	白土原11・12・13号窯発掘調査報告書
池田町教育委員会	舟子古窯跡
豊橋市教育委員会	豊橋市埋蔵文化財調査報告書第19集 大西貝塚
中主町教育委員会	中主町文化財調査報告書第41集 平成4年度 中主町内遺跡発掘調査年報、同第42集 平成5年度 中主町埋蔵文化財発掘調査集報Ⅰ、同第44集 平成5年度 中主町内遺跡発掘調査年報
羽曳野市教育委員会	第13回歴史資料室テーマ展示 高屋城とその周辺
大阪狭山市教育委員会	狭山池調査事務所平成4年度調査報告書、第2回狭山池フォーラム 狭山池の築造と古代の大開発
藤井寺市教育委員会	石川流域遺跡群発掘調査報告X 藤井寺市文化財報告第11集
富田林市教育委員会	富田林市埋蔵文化財調査報告15 中佐備須恵器窯跡発掘調査概要、同21 平成3年度 富田林市内遺跡群発掘調査概要、同22 平成4年度 富田林市内遺跡群発掘調査概要、同24 平成5年度 富田林市内遺跡群発掘調査概要
神戸市教育委員会	平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報、上沢遺跡発掘調査報告書、神戸市埋蔵文化財センター企画展示「海辺の古墳」、地下に眠る神戸の歴史展X、青銅

御津町教育委員会	鏡一卑弥呼から浮世絵まで一、西求女塚古墳 第5次・第7次発掘調査概報
那珂川町教育委員会	御津町文化財報告書1 碓岩南山遺跡I カクチガ浦遺跡群III 那珂川町文化財調査報告書第34集、中原塔ノ元遺跡 同第35集、山田西遺跡II 同第36集
鎮西町教育委員会	鎮西町文化財報告書第12集 畦木場遺跡・平尾野遺跡・石川三長陣跡・福原長克陣跡、同第13集 名護屋城跡周辺遺跡
五木村教育委員会	五木村文化財調査報告第1集 野々脇遺跡
大分県教育委員会	森山遺跡、誠和神社裏遺跡・後藤家墓地・陣ヶ原辻原遺跡・高瀬深ノ田遺跡、河内谷御茶屋跡・河内谷馬場跡、大分県内遺跡発掘調査概報3、大分県文化財調査報告書第92輯 大分の装飾古墳、大分県埋蔵文化財年報3 平成5(1993)年度版
竹田市教育委員会	史跡岡城跡IX、史跡岡城跡X、史跡岡城跡周辺遺跡群 竹田地区南部遺跡群VI、戸上遺跡・小園遺跡・大塚遺跡、町田家屋敷跡
(社)日本金属学会附属金属博物館	金属博物館紀要 第24号
日立市郷土博物館	日立市郷土博物館開館20周年記念誌
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究年報3(1994年度)
千葉県立房総風土記の丘	千葉県立房総風土記の丘年報18
流山市立博物館	流山市立博物館 年報No.17
世田谷区立郷土資料館	特別展 ジャの道は蛇
調布市郷土博物館	調布読本ー近代調布の歩みー
国立科学博物館	上野忍岡遺跡
横浜市歴史博物館	横浜市歴史博物館企画展 幻の縄文土器の時代
土岐市美濃陶磁歴史館	隠居表1・2号窯跡発掘調査報告書
一宮市博物館	企画展 田所遺跡と光明寺
常滑市民俗資料館	文化祭協賛特別展 常滑の赤物展
蒲郡市博物館	特別展 東三河の古墳
高浜市やきものの里かわら美術館	開館記念特別展 かわらの美
豊田市郷土資料館	京ヶ峰1号墳・谷下古墳 豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集、西川1・2号窯址 同第2集、梅坪遺跡II 同第3集、池ノ表古墳 同第4集
愛知県清洲貝殻山貝塚資料館	朝日遺跡II
斎宮歴史博物館	企画展 古代の硯
大阪府立近つ飛鳥博物館	平成7年度冬季企画展 古代の群像
明石市立文化博物館	古墳時代の明石
広島県立歴史博物館	茶・花・香ー中世にうまれた生活文化ー
下関市立考古博物館	下関市立考古博物館 常設展示図録
九州歴史資料館	九州歴史資料館年報(平成6年)、九州歴史資料館 研究論集20
福岡市博物館	平成4年度収集 収蔵品目録10、福岡市博物館研究紀要 第5号
熊本市立熊本博物館	熊本博物館館報No.7
東北学院大学東北文化研究所	東北文化研究所紀要 第27号
早稲田大学考古学会	古代 第100号
早稲田大学図書館	古代 第100号
明治大学考古学博物館	日本考古学50年の足跡
金沢大学文学部考古学研究室	金沢大学考古学紀要 第22号
大阪大学文学部考古学研究室	日本古代の葬制と社会関係の基礎的研究

- | | |
|-----------------------|--|
| 神戸女子大学史学会 | 神女大史学 第12号 |
| 天理大学附属天理参考館 | 天理参考館報 第8号 |
| 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター | 岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第9冊 津島岡大遺跡6、岡山大学構内遺跡調査研究年報12 1994年度 |
| 九州大学埋蔵文化財調査室 | 九州大学埋蔵文化財調査報告 第四冊図版編 |
| 別府大学付属博物館 | 別府大学付属博物館 展示資料図録1995、牟礼越遺跡 |
| 北網圏北見文化センター | 川東15遺跡 |
| 国立国会図書館 | 日本全国書誌 1995年第45号(通巻2048号) |
| (財)韓国文化研究振興財団 | 青丘学術論集 第7集 |
| (株)名著出版 | 歴史手帖 第23巻12号、第24巻1号 |
| パリノ・サーヴェイ(株) | PALYNO No. 1・2 |
| 朝日新聞社 | アサヒグラフ 通巻3842号 |
| 町田市木曽森野地区遺跡調査会 | 木曽森野遺跡Ⅲ－歴史時代編2－ |
| 玉川文化財研究所 | 峯ヶ谷戸遺跡発掘調査報告書 |
| 全国天領ゼミナール事務局 | 金井歴史民俗資料館収蔵品図録集 第一編 |
| 金井町立金井図書館 | 佐渡近世・近代史料書－岩木文庫－下巻 |
| 長浜市文化財図書普及会 | 長浜市埋蔵文化財調査資料第12集 大塚遺跡 |
| (財)古代学協会 | 古代文化 第47巻第11・12号、第48巻第1号 |
| (株)岡墨光堂 | 修復 第2号 |
| (有)真陽社 | 概説 中世の土器・陶磁器 |
| 高山歴史学研究所 | 舞子浜遺跡 高山歴史学研究所文化財調査報告書第4冊 |
| 和泉丘陵内遺跡調査会 | 和泉丘陵内遺跡発掘調査報告書Ⅳ 陶邑古窯址群、和泉丘陵内遺跡発掘調査報告書Ⅵ 万町北遺跡Ⅱ |
| 羽曳野市遺跡調査会 | 檜山地区試掘調査報告、南恵我之荘地区試掘調査報告書、旧石器人のアトリエ |
| (財)由良大和古代文化研究協会 | 元禄年間 山陵記録 |
| 朝鮮学会 | 朝鮮学報 第156輯 |
| 木簡学会 | 木簡研究 第17号 |
| (財)なら・シルクロード博記念国際交流財団 | シルクロード・奈良国際シンポジウム記録集No. 2 「アジアにおける文化遺産の保存と救済」 |
| シルクロード学研究センター | シルクロード・奈良国際シンポジウム記録集No. 2 「アジアにおける文化遺産の保存と救済」、公開セミナーテーマ「アンコール遺跡の保存と救済」 |
| 奈良県立橿原考古学研究所 | 末永雅雄先生旧蔵図書目録 |
| 六甲山麓遺跡調査会 | 郡家遺跡－篠坪地区第10次調査－ |
| (財)のじぎく文化財保護研究財団 | 下小名田遺跡発掘調査概要Ⅳ |
| 淡神文化財協会 | 摂津加茂遺跡第138次発掘調査概要報告書 |
| (財)京都市埋蔵文化財研究所 | 長岡京跡と水垂遺跡のようす |
| (財)長岡京市埋蔵文化財センター | 長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成5年度 |
| 京北町教育委員会 | 上中城跡第2次発掘調査概報 京都府京北町埋蔵文化財調査報告書第5集 |
| 大山崎町教育委員会 | 第1回特別展・展示図録 大山崎山荘と蘭花譜 |
| 宇治市教育委員会 | 継体王朝の謎 |
| 城陽市教育委員会 | 城陽市文化財シンポジウム「山城盆地の古墳と鏡」 |
| 京都府京都文化博物館 | 桃山の春・光悦展 |

丹後町古代の里資料館
三和町郷土資料館
亀岡市文化資料館

城陽市歴史民俗資料館
京都大学考古学研究会
花園大学考古学研究室
口丹波史談会

穴沢啄光
大塚初重
岡田正行

岡村秀典
奥村清一郎
梶川敏夫
小山雅人
水野正好

森島康雄

丹後町の古代遺跡発掘展

平成7年度企画展(第9回)「カイコのいる村ー山里の養蚕史」

開館10周年記念特別展『四季の祭りと年中行事～亀岡歳時記～』、亀岡市文化資料館報 第4号

城陽市歴史民俗資料館展示図録1 古墳のまつり、同2 城陽の指定文化財第46トレンヂ

妙心寺旧塔頭実相院跡調査報告

口丹波史料 形原記 卷三

史峰 第21号

和田東山古墳群

台湾國立故宮博物院 日本版 故宮文物 創刊号、第3～6号、宋代書画冊頁名品特展

福岡からアジアへ3 環濠集落の源流を探る

古文化談叢 第2・3集、第5～15集

智積院境内 祥雲寺客殿跡の発掘調査

大英博物館双書 失われた文字を読む1 楔形文字

奈良大学平城京発掘調査報告書第2集 平城京左京四条三坊十一坪発掘調査報告書

第13回研究集会報告資料 古代末から中世前期における土器から見た貿易陶磁器、第14回研究集会報告資料 土器研究の新視角

編集後記

情報59号が完成しましたのでお届けします。

本号では、前年度の共同研究事業の成果の一部で、57号に掲載した「中世土器の編年」の続編を掲載しました。また、平成7年度事業の内、成果のあがった弓田遺跡の抄報のほか、職員の日頃の研究成果も掲載することができました。ご高覧を賜われば幸いに存じます。

(編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第59号

平成8年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入

Tel (075)441-3155 (代)